BỘ GIÁO DỤC VÀ ĐÀO TẠO

TRƯỜNG ĐẠI HỌC QUẢN LÝ VÀ CÔNG NGHỆ HẢI PHÒNG

KHÓA LUẬN TỐT NGHIỆP

NGÀNH: NGÔN NGỮ ANH - NHẬT

Sinh viên: Dương Thị Thu Yến

HẢI PHÒNG – 2023

BỘ GIÁO DỤC VÀ ĐÀO TẠO

TRƯỜNG ĐẠI HỌC QUẢN LÝ VÀ CÔNG NGHỆ HẢI PHÒNG

日本での神道と神社建築に関する研究–ベトナムでの城隍神信仰と対照

KHÓA LUẬN TỐT NGHIỆP ĐẠI HỌC HỆ CHÍNH QUY

NGÀNH: NGÔN NGỮ ANH – NHẬT

Sinh viên: Dương Thị Thu Yến

Giảng viên hướng dẫn: ThS. Phạm Thị Hoàng Điệp

HẢI PHÒNG – 2023

BỘ GIÁO DỤC VÀ ĐÀO TẠO

TRƯỜNG ĐẠI HỌC QUẢN LÝ VÀ CÔNG NGHỆ HẢI PHÒNG

NHIỆM VỤ ĐỀ TÀI TỐT NGHIỆP

Sinh viên: Dương Thị Thu Yến Mã SV: 1412751115

Lớp : NA2101N

Ngành : Ngôn ngữ Anh- Nhật

Tên đề tài: 日本での神道と神社建築に関する研究–ベトナムでの城隍神信仰と対照

NHIỆM VỤ ĐỀ TÀI

1. Nội dung và các yêu cầu cần giải quyết trong nhiệm vụ đề tài tốt nghiệp

…….

…….

…….

…….

…….

…….

2. Các tài liệu, số liệu cần thiết

…….

…….

…….

…….

…….

…….

3. Địa điểm thực tập tốt nghiệp

…….

CÁN BỘ HƯỚNG DẪN ĐỀ TÀI TỐT NGHIỆP

Họ và tên : Phạm Thị Hoàng Điệp

Học hàm, học vị : Thạc sỹ

Cơ quan công tác :

Nội dung hướng dẫn: 日本での神道と神社建築に関する研究–ベトナムでの城隍神信仰と対照

Đề tài tốt nghiệp được giao ngày 07 tháng 11 năm 2022

Yêu cầu phải hoàn thành xong trước ngày 18 tháng 02 năm 2023

Đã nhận nhiệm vụ ĐTTN	Đã giao nhiệm vụ ĐTTN
Sinh viên	*Giảng viên hướng dẫn*
Dương Thị Thu Yến	ThS. Phạm Thị Hoàng Điệp

Hải Phòng, ngày 24 tháng 02 năm 2023

XÁC NHẬN CỦA KHOA

CỘNG HÒA XÃ HỘI CHỦ NGHĨA VIỆT NAM

Độc lập - Tự do - Hạnh phúc

PHIẾU NHẬN XÉT CỦA GIẢNG VIÊN HƯỚNG DẪN TỐT NGHIỆP

Họ và tên giảng viên:	Phạm Thị Hoàng Điệp
Đơn vị công tác:	
Sinh viên:	Dương Thị Thu Yến
Chuyên ngành:	Ngôn ngữ Anh- Nhật
Nội dung hướng dẫn:	日本での神道と神社建築に関する研究–ベトナムでの城隍神信仰と対照

1. Tinh thần thái độ của sinh viên trong quá trình làm đề tài tốt nghiệp

.....

.....

.....

.....

2. Đánh giá chất lượng của đồ án/khóa luận (so với nội dung yêu cầu đã đề ra trong nhiệm vụ Đ.T. T.N trên các mặt lý luận, thực tiễn, tính toán số liệu…)

.....

.....

.....

.....

3. Ý kiến của giảng viên hướng dẫn tốt nghiệp

Được bảo vệ ☐ Không được bảo vệ ☐ Điểm hướng dẫn ☐

Hải Phòng, ngày … tháng … năm .....

Giảng viên hướng dẫn

QC20-B18

CỘNG HÒA XÃ HỘI CHỦ NGHĨA VIỆT NAM

Độc lập - Tự do - Hạnh phúc

PHIẾU NHẬN XÉT CỦA GIẢNG VIÊN CHẤM PHẢN BIỆN

Họ và tên giảng viên: .....

Đơn vị công tác: .....

Họ và tên sinh viên: Dương Thị Thu Yến

Chuyên ngành: Ngôn ngữ Anh- Nhật

Đề tài tốt nghiệp: 日本での神道と神社建築に関する研究–ベトナムでの城隍神信仰と対照

1. Phần nhận xét của giáo viên chấm phản biện

.....

.....

.....

2. Những mặt còn hạn chế

.....

.....

.....

3. Ý kiến của giảng viên chấm phản biện

Được bảo vệ ☐ Không được bảo vệ ☐ Điểm hướng dẫn ☐

Hải Phòng, ngày … tháng … năm 2023

Giảng viên chấm phản biện

QC20-B19

謝辞

論文を完成するために、私は学校、教師、クラスメート、家族に感謝したいと思います。みんなさんはいつも私と一緒にいて、たくさんの意見と指導してもらいます。まず、ハイフォン工芸と管理大学のグエン・チエン・タン（NguyễnTiếnThanh）校長感謝したいと思います。次、私はチャン・テイ・ゴック・レン（TrầnThịNgọcLiên）学部長をはじめ、ハイフォン工芸と管理大学の外国語学科の先生に感謝することを表したいと思います。特に、私は 4 年間教えて、3 ヶ月間私の論文を作成するのを指導してくれた日本語教師のファム・ティ・ホアン・デイエップ（PhạmThịHoàngĐiệp）先生に非常に感謝しています。デイエップ先生は熱心な先生で、忙しい仕事なのに、できるだけ多くの学生を支援するために自分の貴重な時間を調整しました。先生は心をこめて教え、それぞれの間違いを細かく修正して、それにデイエップ先生に多くの役に立つ知識を与えました。そのおかげで、今日、私は学校が割り当てた卒業の仕事を完了することができました。心からお礼を申し上げます。しかし、私の知識が限られていることを知っているので、論文は間違いを避けることできません。私は先生からのご意見を受けたいと思います。まことにありがとうございます。

ハイフォン、2022 年１２月８日

学生

ズオン・ティ・トゥ・イェン

目次

序論 1
1. 話題研究の選択理由 1
2. 研究の目的 2
３．研究の対象、範囲 3
４．研究の方法 3
5. 研究の構成 4
内容 5
第１章. 日本における神道の形成と発展歴史 5
1.1. 神道の由来と発展段階 5
1.1.1. 形成の基礎 5
1.1.2. 発展段階 6
1.1.2.1. 古代時期 6
1.1.2.2. 中世時期 8
1.1.2.3. 近代時期 9
1.1.2.4. 現代時期 11
1.2. 神道の儀式、儀礼 12
1.2.1. 神道の崇拝対象 12
1.2.2. 日本人の生活に関する神道儀礼 14
1.2.2.1. お宮参り 14
1.2.2.2. 少年少女まつり 15
1.2.2.3. 成人式 17
1.2.2.4. 結婚式 17
1.2.2.5. 葬式 18
1.3. 日本人の日常生活における神道の役割と意義 19
1.3.1. 宗教の役割 19
1.3.2. 日本人の精神生活に対する影響 21
１．４．第１章のまとめ 23
第２章. 神社と神社の建築の概要 24
2.1. 神社の形成と発展歴史 24

2.1.1. 古代時期 24
2.1.２.中世時期 25
2.1.3. 江戸時代 26
2.1.4.近現代時期 26
2.2.神社の建築 27
2.2.１. 神社の建築構成 28
2.2.1.1. 鳥居 28
2.2.1.2. 本殿（神殿）と拝殿 29
2.2.1.3. 屋根 29
2.2.1.4. フレーム 30
2.2.2.地方の神社と国家の神社 31
2.2.2.1.地方の神社 31
2.2.2.2.国家の神社 33
2.3.神社で行われる儀礼・祭り 34
2.3.1. 神道の儀式を行う官人 34
2.3.1.1.神主(Thần chủ - Chủ tế) 34
2.3.1.２.女帝(Nữ tư tế) 35
2.3.1.3.巫女（みこ- Vu nữ） 35
2.3.2.人生に関する儀礼 35
2.3.2.1.初宮詣 36
2.3.2.2.七五三詣 37
2.3.2.3.厄年祓 37
2.3.3. 年中の祭りと行事 38
2.3.3.1.元旦祭（1 月 1 日） 38
2.3.3.2.成人祭(1 月第 2 月曜日) 38
2.3.3.3.年越祭(としこしさい)(2 月 10 日・11 日) 38
2.3.3.4.祈年祭（きねんさい）2 月 17 39
2.3.3.5.天長祭(2 月 23 日) 39
2.3.3.6.皇霊殿遥拝式（こうれいでんようはいしき） 39
2.3.3.7.御座替祭(ございたいさい)（4 月 1 日・11 月 1 日） 39
2.3.3.8.新嘗祭（にいなめさい）11 月 23 日 39

2.3.3.9.大祓（おおはらい）6 月 30 日・12 月 31 日 40
2．4． 神社参拝のマナー 41
2.5. 第 2 章のまとめ 42
第 3 章. 日本の神道 - ベトナムの城隍神信仰との対照 44
3.1. 城隍神信仰の概要 44
3.1.1. 由来と発展歴史 44
3.1.2.亭の建築（村の鎮守社兼集会所） 48
3.1.3.崇拝の儀式 53
3.2.日本の神道・神社とベトナムの城隍神信仰・亭の建築の対照 54
3.2.1.共通点 54
3.2.2.相違点 57
3.3. ベトナムでの城隍神信仰と日本での神道 - 両方の役割についての評価 60
結論 63
参考資料 65
付録 66

序論

ベトナムと日本はアジアに位置する 2 つの国であるため、非常に似た文化を持っている。ベトナムと日本はどちらも、自然に大きく依存する水稲農業から生まれた国である。したがって、両国は、木の神、川の神、山の神、海の神、火の神などの自然の神々に大きな敬意を払っている。

ベトナムも日本も中国文化の影響を受けている。たとえば、漢字を公式の文字として吸収し、仏教、儒教、その他の中国の宗教の規則を教育の構築、才能の育成、社会管理機構の組織化に適用している。

1. 話題研究の選択理由

日本は観光客にとって美しい観光地として知られている国である。日本料理も美味しく有名だけでなく、神道と神社も有名である。日本語と日本文化を学び交流した事で日本の伝統的な文化の美しさの多くが古代から日本文化に固有の神道思想が多くある事に気づきました。神道は日本最古の宗教である。それは歴史の黎明期、人々がまだ自然の中で、木々、山、海、涼しい風の中にさえも神々がいると信じていた時代に始まった。自然の中で生き残りたい人間は、その超自然的な力のためにこれらの神々を崇拝する必要がある。

神道は日本人の主要な伝統的、宗教的信仰である。多くの神々がいる。ほとんどは大地の魂（たましい）、空、月、植物、花などの自然に関係している。日本全国に 8 万以上の神社がある。人々の精神的な絆（きずな）として、信仰と信念を持って、一年を通して多くの祭りが開催される。自然の要素を表す神々は人々と自然に結び付く、貴重で注意する。

生活の中で神道は個性の形成に純粋さと正直を強調する。さらに、神道の精神はそれぞれの家庭にも表れており、子供たちは先祖を敬い、常に自分の心に耳を傾けるように教えられている。神道は、日本の伝統文化全体の根源(こんげん)であり、重要な基盤(きばん)である。

日本人と同様に、ベトナム人も神々に非常に敬虔である。この元来の信仰の名残は、今日でもノーザンデルタのいくつかの村に残っている。たとえば、石の崇拝、木の崇拝、歌の神、山の神などである。

神道信仰は日本人の心の中で非常に重要な役割を果たしており、城隍神の信仰や村の亭の建築も私たちベトナム人にとって大きな意味を持っている。このように、日本の神道の信仰とベトナムの城隍の信仰を研究し、研究することは、2 つの民族の文化的価値観の特徴と類似性をより明確に示してくれる。

以上の理由に基づいて、「**日本での神道と神社建築に関する研究-ベトナムでの城隍神信仰と対照**」というテーマを選択することにした。このテーマを研究することで,私は日本についてもっと学びたいだけでなく,少しでもこの美しい国豊富な知識の倉庫に貢献(こうけん)したい。

2. 研究の目的

第一の目的は日本における神道の形成と発展の歴史と言うのであり：形成の基礎、開発段階、神道の儀式、日本人の社会生活に神道の役割と意味。

第二の目的は神社の建築を概要：神社の形成と発展の歴史、神社の建築、神社で儀礼、祭りが行われる。

第三の目的は神道とベトナムの城隍神の信仰を比較対照し：類似点、相違点と両国の国民に対する役割を分節、評価する。

ベトナムと日本は文化と歴史について多くの類似点(るいじてん)がある。このテーマの研究内容は読者に日本の社会的、文化的生活に神道の役割と思想についての包括的(ほうかつてき)な見方を提供し、それに、日本文化の伝統美を形成する過程で神道の思想についてより深く簡単に理解できる。神道と日本の文化生活への役割には、豊富、新しいテーマである。このテーマを研究するために、神道を調べる通じてベトナムの神崇拝の信仰と類似点と相違点を比較したい。同時に、伝統的なベトナム文化の思想の価値についての認識を高め、国民的アイデンティティを吹き込まれた新しい文化を建設する過程で貴(とうと)い経験を提供する。

３．研究の対象、範囲

研究の主な対象は日本での神道と神社建築に関するのである。また、ベトナムの文化を研究している方や興味のある方に向けて、ベトナムの城隍神の信仰を紹介したい。そして、儀式の美しさ、日本人の生活に対する神道の役割と意味も述べる。

範囲:起源から現在までの神道の形成と発展歴史を研究する。また、いくつかの有名な日本の神社も紹介したい。

研究を実現する期間は３か月である。

４．研究の方法

論文の目標を達成するにはさまざまな方法を使用する必要がある。私たちが使用した方法は：いくつかの作品、教師の研究、カリキュラム、インタネットで調べた情報を収集してから、比較、証明、資料処理をする。他は、分析手法は主に使われた。

5. 研究の構成

研究は 3 つの部分で構成されている。それらは序論、内容、結論である。

序論は研究の理由、目的、対象、範囲、方法、構成が含まれている。

内容は３章に分かれている。

第 1 章：日本における神道の形成と発展歴史：形成の基礎、発展の歴史、神道の儀式、日本人の社会生活における神道の役割と意味。

第 2 章:神社建築の概要：神社の形成と発展の歴史、神社の建築、神社で行われる儀礼・祭り

第３章:日本の神道とベトナムの城隍神の信仰を比較対照する。共通点、相違点、ベトナムでの城隍神の信仰と日本での神道それぞれの役割とその評価である。

最後は結論、参考資料と絵画付録である。

内容

第 1 章. 日本における神道の形成と発展歴史

1.1. 神道の由来と発展段階

1.1.1. 形成の基礎

神道（しんとう、しんどう）は、古代日本に起源をたどることができるとされる宗教である。伝統的な民俗信仰・自然信仰・祖霊信仰を基盤に、豪族層による中央や地方の政治体制と関連しながら徐々に成立した。また、日本国家の形成に影響を与えたとされている宗教である。こちらは特別な宗教で、教典や具体的な教えはなく、開祖もいない。神話、八百万の神、自然や自然現象などにもとづくアニミズム的、祖霊崇拝的な民族宗教である。

神道の起源は非常に古く、日本の風土や日本人の生活習慣に基づき、自然に生じた神観念である。日本の歴史の初期には、日本人は村の端にある木の切り株や岩の山など、住居の近くのあらゆる場所で神を崇拝していた。その後、徐々に神社が出現し、神々は壮大な神社（神）に入り込み、非常に独特な文化的ニュアンスを生み出した。

自然や祖霊、死者への畏敬の念を根幹とした信仰で、神様は地域社会を守り、恵みを与える守護神であると同時に、天変地異や病を招きよせ、祟りをもたらすとして怖れられてもいた。神道では、人は亡くなると神になるとされているため、地位社会に貢献した人や、社会的に突出した人物は、死後神社に神様として祀られることもある。

「神道」という名称については「かんながらの道（神道）と言う意味である。中国の『易経』や『晋書』の中にみえる神道は「神（あや）しき道」という意味であり、これは日本の神道観念とは性質が異なる別個のものである。

明治 20 年代（19 世紀末）になると、西欧近代的な宗教概念が日本でも輸入され、宗教としての「神道」の語も定着し始めた。同 30 年代（20 世紀初）には宗教学が本格的に導入され、学問上でも「神道」の語が確立した。

中世には、このような神道古典に見られる基本観念を体系的に追求し、神道の教学化を図る動きが見られた。その最初期の動きは、両部神道や山王神道など、仏教の僧侶たちが仏教の教理に基づいた神道解釈を試みた仏家神道であった。それらの仏家神道説に影響を受けつつ、それに対抗する形で、神宮神官らにより社家の立場からの神道説である伊勢神道が形成された。

6 世紀に仏教が伝来した際、この日本固有の信仰は、仏教に対して神道という言葉で表わされるようになった。

神道の神々は、海の神、山の神、風の神のような自然物や自然現象を司る神々、衣食住や生業を司る神々、国土開拓の神々などで、その数の多さから八百万の神々といわれる。さらに、国家や郷土のために尽くした偉人や、子孫の行く末を見守る祖先の御霊も、神として祀られた。奈良時代にできた『古事記』『日本書紀』には、多くの神々の系譜や物語が収められている。神道はこのように、人々の日常生活と密接な関係を持つ日本の信仰形態で、過去においてもそうであり、現代にもそれが続いている。

1.1.2. 発展段階

1.1.2.1. 古代時期

現在の神道・神社に直接繋がる祭祀遺跡が出土するのは、農耕文化の成立に伴って自然信仰が生じた弥生時代で、この時代には、荒神谷遺跡などに代表される青銅器祭祀、池上曽根遺跡のような後の神社建築

と共通する独立棟持柱を持つ建物、鹿などの骨を焼いて占う卜骨、副葬品としての鏡・剣・玉の出土など、神社祭祀や記紀の神道信仰と明らかに連続性を持つ要素が見られるようになる。

神仏習合と神仏隔離：

日本人は、古くから神道を崇拝していた。しかし、インドで生まれた仏教が、西暦 538 年に中国を経て日本に伝わってきる。外来宗教の仏教を受け入れるにあたり、さまざまな葛藤や対立に直面する。

そこで日本は、「神仏習合」という考え方を選択した。神も仏も両方信じるという発想で宗教観の対立を抑え、両者のいいところを取り入れながら現在につながる神道を形成していったのである。日本における仏教も同じように、初期の段階から神道の影響を受けている。

神道と仏教の違いと共通点：

仏教は、教祖のお釈迦様が解いた教えに基づく経典・教義があるのに対し、神道には明確な「教え」がない。ただし、「神仏習合」によって互いのエッセンスが取り入れられたことから、同じ名前の神様と仏様がいる。

6 世紀に仏教が公伝すると、物部氏と蘇我氏の仏教受容をめぐる抗争を経て、日本にも仏教が広がるようになった。しかし、当初は仏が「蕃神（あだしくにのかみ）」と呼称されたり、司馬達等の娘嶋など女性が出家者となって巫女のように仏像の管理を行うなど、仏教は在地の神祇信仰的に取り入れられ、質的に違いがあるとは認識されなかった。その後、7 世紀に入ると日本の神々もまた、天部にあって人と同じく解脱を目指している存在として捉える「神身離脱説」が生じ、神前読経などを行うための施設として神社内に神宮寺が建立されるようになった。

他方、朝廷や神宮においては神仏隔離の思想も見られるようになる。『貞観儀式』『儀式』などの規定によって、大嘗祭の期間は中央及び五畿の官吏が仏事を行うことが禁じられ、中祀および内裏の斎戒を伴う小祀には、僧尼の代理への参内を禁じ、内裏の仏事が禁じられ。平安時代中期以降には新嘗祭、月次祭、神嘗祭などの天皇自らが斎戒を行う祭においては斎戒の期間中内裏の仏事をやめ、官人も仏法を忌避することとなった。伊勢神宮でも、境内では「仏」を「中子」、「僧侶」を「髪長」に言い換えるなどの忌詞の制が敷かれ、斎宮でもこれに準じて忌詞が用いられた。このように、神仏習合は信仰ベースで進みつつも、祭祀儀礼は神道と仏教が別体系で存在したのである。

1.1.2.2.中世時期

- 吉田神道の形成：

応仁年間に入ると、応仁の乱が生じて京都は焼け野原となり、多くの寺社にも影響を与え、大嘗祭や即位式などの朝廷儀礼も中絶した。その動乱に衝撃を受けた神官の一人が、吉田兼倶である。兼倶は自らが奉職してきた吉田神社を戦火により失うとともに、吉田神社周辺の住人十数名が戦災のために命を落とし、動揺のあまり出奔するに至った。しかしながら、この戦災のために多くの古典籍を喪失したことが、かえって吉田神道という新たな神道説が形成される契機となった。

兼倶は神道を「本迹縁起神道」（各神社に伝わる縁起類）、「両部習合神道」、「元本宗源神道」の三つに分類し、自家に伝わる「元本宗源神道」こそが我が国開闢以来の正当な神道だとし、神を「天地万物の霊宗」、道を「一切万行の起源」と定義した。また、神道と儒教や仏教との関係について、神道が根元であり、儒教はそれが中国で枝葉として現れたもので、インドに至り果実として仏教が花開いたとする根本枝

葉果実説を強く主張し、三教一致の立場に立ちながら、神道こそが宗教の本質であると主張した。

吉田神道は人を神として祀る神葬祭の儀礼も確立した。古来、神道においては死を穢れとみなす習慣によって葬祭にはあまり関わってこず、亡くなった人を神として祀る例も、怨霊信仰や天神信仰など怨霊を鎮めるという形式に限られていた。しかし、人と神を密接な関係性で捉える吉田神道においては積極的に葬送儀礼が行われ、吉田兼倶はその遺骸の上に霊社となる神龍社を創建させた。

吉田神道は新興勢力でありながら、戦乱の時代という社会不安もあってか急速に台頭し、大元宮の建立に際して日野富子の後援を受けたり、1473 年（文明 5 年）には大元宮の勅裁まで受けるなど、上流階級を中心に広く受け入れられていき、近世の神道界の中心となった。他方で、伊勢神宮の内外両宮の祠官などからは強い抗議を受けている。

吉田神道は、中世神道思想を集大成し、様々な宗教の諸言説を越境的に統合しつつ、仏教から独立した独自の教義・経典・祭祀を持つはじめての神道説となり、神道学者の岡田荘司は吉田神道の成立を「神道史上の転換期」と述べ、歴史学者の黒田俊雄は吉田神道の成立が神道の成立であると主張するなど、複数の研究者から神道史上の画期であると捉えられている。

1.1.2.3.近代時期

太平の江戸時代であるが、社寺の所管については寺社奉行所により差配されていたのは周知の事実だけど、神社に比較して寺は本山末寺の関係が明確にして支配体制が確立しておりました都合、その制度を神社の管理にも利用した点において、神仏習合の形が極まったということが言える。

幕府は神祇制度や朝儀について基本的に尊重する姿勢をとった。このような基本姿勢のもと、応仁の乱以降跡が絶えていた様々な儀式、祭事が復興し、神祇制度のみならず、社家の支配体制も次第に整えられ、吉田家と白河家を中心に神職をその支配下に置くという構造が確立した。また由緒ある祭儀の復活と共に、徳川家康を祭った東照宮のように新たに崇拝の対象となった神社も生じてきたのである。

江戸時代の神社の特色は、家康を祭る東照宮が建立され、政治的に全国に分布を広げていったこと。

19 世紀になると、神道の歴史に大きな転換期が訪れた。それは、２００年以上にわたる鎖国による封建主義が終わりをむかえようとした１８６０年代から、日本が新しい国づくりを目指す文明開化という時代に入ったからである。ヨーロッパやアメリカで、自分たちとは違う文明や価値観を見聞した日本の為政者たちは、日本にも精神的な規範が必要だと考え、神道が日本の伝統的な信仰であり、日本人の日常生活に深く浸透しているものであることに着目した。そこでまず神社と寺院とを分離し、さらに神社を整理統合し、国家の支配下に置くことにした。いわゆる「国家神道」の発生である。

- 国家神道の形成と展開：

1871 年（明治 4 年）、太政官布告 234 号の通達で、神社が「国家の宗祀」と定義された。これに基づいて、近世以前の神社や神道のあり方が大幅に変革され、神社を国家が管理する、いわゆる国家神道と呼ばれる体制が形成されていった。明治維新の当初は平田派国学者が政府の中枢にあって祭政一致や神道国教化が図られた。神社行政が社寺局に編成されると、府県社以下の神社はあくまで寺院と同じ一宗教であるとされ、1877 年（明治 10 年）に神職身分が官吏ではないものとされ、1879

年（明治 12 年）に公的な支出が打ち切られた。（なお、神職への公費からの給与支払いは、すでに 1873 年（明治 6 年）に打ち切られている）。さらに官国幣社に関しても、身分は官吏のままとされたものの、1887 年（明治 20 年）に官国幣社保存金制度が導入され、向こう 10 年間は公金を支出するが、それ以降は公費の支出を打ち切ることとされ、政教分離の原則に従い行政と神社の切り離しが行われた。また明治時代に入ると、国事に殉じた人々を祀るための靖國神社や、南朝の楠木正成を祀る湊川神社、護良親王を祀る鎌倉宮、菊池武時を祀る菊池神社など、国家に功績のあった人物を神として祀る神社の創建も多く行われている。

維新政府が神仏分離政策をとり神社神道を国家的に護持し、近代天皇制を確立しようとしたことは神道界にさまざまな影響を及ぼし神社神道は近世とは大きく異なる歩みを始めることともなった。教派神道という新しい潮流の形成が加速化されることともなった。

1.1.2.4.現代時期

さらにまた近代においては、神社神道や教団神道が海外進出するようになった。これも以前には見られなかった新しい現象である。

また、習俗、人生儀礼、年中行事といった民族神道的な部分も、都市化、工業化などに伴う生活形態の変化によって、近代を通し少しずつ変容を迫られてきた。

近世末期の農業人口は全体の八割と言われていたが、昨今では一割以下になってしまった。稲作文化と深く結びついていた各地の民族神道が、次第にその内容を失う傾向にある。

祭がイベント化し宗教性が薄れるという現象も見られる。しかしそうしたものが共同体や地域社会にもっている機能はなくなってはいない。祭が神道、さらには日本文化の最も大きな特徴の一つであるという点に変わりはない。民族神道的な部分は、近代文化の中で、かえってその根強さを示していると言える。

現在日本人が奉じている神道という信仰は、皇室神道、神社神道、教派神道の三種を総称したものですが我々一般に神道という場合は神社神道を指す。

仏教に宗派があるように、神道も時代や政治利用等によって少しずつ意味や内容が異なるものを分類できます。宗派というよりは概念に近いものもありますが、大きく分けると以下の 5 種類です。

・神社神道：現在も神社を中心に信仰されている、一般的にイメージされる神道のこと。

・皇室神道：皇室による大嘗祭や新嘗祭を始めとした祭祀をおこなう神道　　。

・教派神道：伊勢神宮や出雲大社など古くから続く神社から生まれた神道や、金光教など教祖の神秘的体験から生まれた神道のこと。

・復古神道（江戸時代中期から明治時代まで）：外来宗教の影響を排除し、日本固有の信仰の在り方を復活させようとした神道のこと。

・国家神道（明治から第二次世界大戦終戦まで）：天皇統治体制強化のために、国家が国民に信仰するよう働きかけた神道のこと。

1.2. 神道の儀式、儀礼

1.2.1. 神道の崇拝対象

神道には確定した教祖、創始者がおらず、キリスト教の聖書、イスラム教のコーランにあたるような公式に定められた

「正典」も存在しないとされる.森羅万象に神が宿ると考え、また偉大な祖先を神格化し、天津神・国津神などの祖霊をまつり、祭祀を重視する。浄明正直（浄く明るく正しく直く）を徳目とする。

項目	神道	一般宗教
1. 信仰対象	多神教（八百万の神々）	一神教（唯一神）
2. 教義・教典	なし	あり（仏典・聖書など）
3. 主体性	崇敬者側（氏子）	教団側
4. 布教活動	なし	あり
5. 信仰物	依り代崇拝	偶像崇拝

B1.神道とほかの宗教の比較

仏教やキリスト教など、世界宗教の多くが「一神教」であるのに対し、神道は「多神教」の考えを基にしている。すべての神々は「天の神」と「地上の神」に区別され、その神々のトップに君臨するのが、天皇の祖先と考えられている天照大神（あまてらすおおみかみ）である。

神道は、地上の森羅万象に神が宿るという考え方がベースです。「祖先崇拝」や「自然崇拝」が基本で、「八百万（やおよろず）の神」と呼ばれる多数の神を崇拝する。

そして、神道を語る上で欠かせないのが天皇の存在である。天皇は、八百万の神の中でも最高の神格を有する「天照大神（あまてらすお

おみかみ）」の末裔と考えられている。皇室の儀式が、神式でおこなわれているのはこのためである。

神道において、亡くなった人は家族を見守る祖先神（そせんしん）になり、死後の世界で家族や子孫を見守っていると考えられている。

1.2.2.日本人の生活に関する神道儀礼

神道には教義や教典の代わりに、古事記、日本書紀といった古典が神典とされています。自然の中に神が宿ると考え、祖霊をまつり、祭祀を行う。

1.2.2.1.お宮参り

人生の特定の段階を示すために、神道の儀式も行われる。生後 1 ヶ月（男の子は 31 日目、女の子は 32 日目）に、赤ちゃんは両親や祖父母によって寺院に運ばれ、僧侶が赤ちゃんの幸せと健康を祈る。この儀式を宮参り言う。お宮参りは、生まれた土地の守護神である産土神（うぶすなかみ）に赤ちゃんが無事誕生したことを報告し、これからの健やかな成長をお祈りする儀式である。

「産土詣（うぶすなもうで）」と呼ばれるお産の後に神様に挨拶する風習を起源とし、室町時代頃に「お宮参り」と呼ばれるようになった。現在はお宮参りの他に、初宮参り（はつみやまいり）や初宮詣（はつみやもうで）と呼ぶ場合もある。

正式な習わしでは生まれた日を 1 日目として数え、男の子は生後 31 日目~32 日目、女の子は生後 32 日目~33 日目に行いる。しかし現在は、お宮参りの時期に厳密な決まりはなく、生後 1 ヵ月頃を目安にお宮参りを行うご家庭が多い傾向である。

お宮参りでは、赤ちゃんに「祝着（のしめ）」や「ベビードレス」といった晴れ着を着せる。ご家族の服装は、主役の

赤ちゃんを引き立てるような上品でフォーマルなスタイルに仕上げるのがマナーである。

赤ちゃんの正式な服装は和装である。「白羽二重」と呼ばれる着物の上に、祝着（のしめ）を掛ける。

男の子の祝着（のしめ）は、熨斗目模様に兜や鷹・武者・龍などの柄が人気です。色味は黒や紺・緑・灰色が定番でしょう。女の子の祝着（のしめ）は、友禅模様に桜や牡丹・蝶・花車・御所車などの柄が好まれる。色味はピンクや赤や白が定番である。ご家族の服装は、赤ちゃんに合わせるのが基本である。赤ちゃんが正装の場合、ママと祖母は訪問着や色無地を選びる。赤ちゃんがベビードレスを着る場合は、ワンピースやスーツでフォーマルな装いをしましょう。

パパや祖父はスーツが主流である。礼服（ブラックのフォーマルスーツ）やダークカラーのスーツを着用しましょう。カジュアル過ぎたり派手過ぎたりする服装は避け、控えめで品のよいスタイルを意識する。

1.2.2.2.少年少女まつり

少年少女まつりは男児が 5 月 5 日、女児が 3 月 3 日に祝う生後初めての節句である。男児は兜、武者人形や鯉のぼりで力強い門出を祝い、女児はお雛様や桃の花を飾って美しく健やかな生育を祈る。

ひな祭りは女の子の健やかな成長を願う行事である。「3 月 3 日は「上巳（じょうし）」または「桃の節句」と呼ばれる。一般的には「桃の節句」と呼ばれ、女の子のいる家庭では、雛人形を飾り、桃の花・菱餅・雛あられを供えて祀り、白

酒や寿司などの飲食を楽しむ節句祭りが行われる。ひな祭りでは、「ちらし寿司」、「はまぐりのお吸い物」、「白酒」、「ひなあられ」、「菱餅（ひしもち）」などを食べるのが一般的である。

江戸時代初期に「上巳の節句（桃の節句）」は 3 月 3 日と定まり、江戸中期には女の子のひなまつりとして一般的になる。しかし、この習慣はなくなった。

端午（たんご）は、五節句の一つ。端午の節句（たんごのせっく）、菖蒲の節句（しょうぶのせっく）とも呼ばれる。日本では端午の節句に男子の健やかな成長を祈願し各種の行事を行う風習があり、現在ではグレゴリオ暦（新暦）の 5 月 5 日に行われ、国民の祝日「こどもの日」になっている。

端午の節句では、五月人形や鯉のぼりを飾り、ちまきや柏餅を食べ、菖蒲湯に入る風習などがある。古くから続いてきた伝統的文化ということである。端午の節句で特徴的なメニューは、厄除け・魔除けの意味と、成長・出世を願う意味の 2 通りの意味でふるまわれることが多いようである。

そのほか、真っすぐ伸びていくよう願いを込めた「たけのこご飯」、立身出世を願うブリなどの「出世魚」、「勝男」にちなんだ「カツオ」も端午の節句ならではのメニューといえるでしょう。

現在、少女と少年はもはや宗教的信念ではないが、それでも彼らがその重要性を認識し、守護神のように私たちに思い出させるのに役立つ重要な日である。

七五三詣り

11 月 15 日に 3 歳の男女児、5 歳の男児、7 歳の女児が身を清め晴れ着をまとい、親子そろって神社に参拝し、健やかな成長を神様に感謝する。

1.2.2.3.成人式

男女とも、満 20 歳になる年の 1 月 15 日に新成人として国や社会に貢献する事を報告祈願する。昔は、男子は加冠（かかん）、女子は着裳（ちゃくも）の儀を行った。

成人式の服装は、新成人としてふさわしい清潔感のある正装であれば、基本的に制限はない。しかし割合的には、女性であれば袴・振袖といった和装、男性であればスーツもしくは紋付き袴を選ぶ方が多いでしょう。

1.2.2.4.結婚式

結婚は、数ある人生儀礼の中でも最も晴れやかな節目となる。神様のおはからい（御神縁）によって結ばれた二人の新たな門出を祝うと共に、神様の前で、苦楽をともにして明るく幸せな家庭を築き、子孫の繁栄をはかる事を互いに誓い合う。

人と人が出会い縁をむすぶ結婚も神さまのお力であると考えられてきました。古来の結婚の儀は自宅の床の間にお祀りされた神さまの前で神酒の盃を交わす形で行われたが、明治以降は神社での神前結婚式が行われるようになった。

伝統的な神道の結婚式を行うことを選択したカップルは、通常、寺院の敷地内で開催されます。本殿では、神職が夫婦のために禊を行い、神前に祈りを捧げる。

そしてここで行われる結婚式は近親者のみが出席することが許されている。

白無垢は、細心の注意を払った手刺繍のディテールが施された非常に洗練されたウェディングドレスで、トップに着用される。白は純粋さを象徴し、さらに白は夫の家族の他の色と組み合わせることができる色です. シロムクの衣装の内側と外側に含まれるすべてのアクセサリーは白である。

新郎のウェディングドレスは非常にシンプルで、花嫁のウェディングドレスほど洗練されていない。

濱田：結婚式で新郎が普段使っている袴は縞袴である。

あるいは、花嫁は打掛けまたは色打掛と呼ばれる色とりどりの着物を着ることができる。

手水の儀(ちょうずのぎ):セレモニーの前に、花嫁は自分自身を清めるためにこれを行いる。

修祓（しゅばつ）：祓詞で清める

三三九度(さんさんくど):誓いの代わりに、新郎新婦は、過去、現在、未来の意味を持つ 3 つの異なるサイズのカップ(さかづき)からそれぞれ 3 回ずつ酒を飲む。

玉串拝礼（たまぐしはいれい）：新郎新婦の心をつなぐ儀式。玉串は神様に願いを伝える道具である。

玉串は、夫婦になったときに同じ思い、同じ生き方、同じ意見を持つように、カード同士が近くなるように配置する必要がある。

1. 2. 2. 5. 葬式

神道のお葬式「神式葬儀」

神道のお葬式である神式葬儀は、仏式葬儀とは意味や様式、手順も異なる。仏教のお葬式は故人を極楽浄土に送るためにおこなわれますが、神道のお葬式は、故人を家に留め死の穢れ（けがれ）を払い、守護神となってもらうための儀式とされている。

穢れとは、清潔さや純粋さなどを失うことで、死・血・悪しき事などにともなって生じるとされている。物質的に触れずとも、精神だけでも伝染するとみなされ、神聖な領域である神社で神葬祭がおこなわれることはほとんどない。

日本では、明治以前の檀家制度の流れからほとんどのお葬式が仏式でおこなわれている。神道のお葬式は全体の数%に留まるものの、最近は簡素で厳格なイメージのある神道の葬式「神葬祭」に興味を持つ人も少なくない。

神道の葬式（神葬祭）の流れ

神葬祭では、1 日目におこなわれる「遷霊祭（せんれいさい）」で、仏式の位牌にあたる霊璽（れいじ）に故人の霊魂を移する。そして、2 日目に「葬場祭（そうじょうさい）」をおこない、死の穢れを清め、故人を家の守護神として祀る。

神道において、命はいつか神様に返さなければならないものとされる。命を返すタイミングが死であり、諡を持って神の世界に再び戻ると考えられているのですある。

そのため、神道では仏式の位牌にあたる霊璽（れいじ）や、奥津城（おくつき）と呼ばれるお墓に名前を刻むとき、必ず諡を加えることが決められている。

1.3. 日本人の日常生活における神道の役割と意義

1.3.1. 宗教の役割

宗教の本来的な役割は、このような、マイナス優先思考、苦悩、際限のない欲望のなどの悪循環から人間（ヒト）を救済し、精神の安定化装置として機能することなのである。宗教は、その役割を教義への信仰という形で実現しようとする。宗教は、自国の政府に対する責任を負っているし、自由を擁護するし、民主義を擁護するし、文明を進歩させる役割を持つ。

１６世紀にはキリスト教が日本に上陸した。キリスト教の宣教師たちは、日本人が神社にもお寺にもおまいりするのを見て、驚いた。ある宣教師は祖国に、次のようなレポートを書き送っている。「日本には宗教が二つある。神道と仏教というもので、長い年月を経て、お互いに影響しあって、日本人の生活に大切な溶け込んでいる。

神道は日本国内で約 8 万 5,000 の神社が登録され、約 8,400 万人の支持者がいると『宗教年鑑』（文化庁）には記載がある。日本では「文化庁」という役所が宗教団体を取り扱っていて、毎年、「宗教年鑑」という日本の宗教に関する統計を発表している。それによりますと、文化庁に登録されている宗教法人の総数は１８２，９８５法人で、内訳は、神道系が８４，９９６法人と全体の４６．４％を占めており、仏教系が４２．９％、諸教が８．４％、そしてキリスト教系が２．３％となっています。さらに、それらの法人に属している信者・会員の総数は、２１３，８２６，７００人で、神道系がそのうちの５０．３％、仏教系が４４．０％、諸教が４．７％、そしてキリスト教系が１．０％となっている。ここで、みなさん、気が付いたことと思うが、日本の最近の人口は１億２千万人強だが、文化庁に登録された宗教団体に属する信者総数は２億１千３百万人強となっていること。

つまり宗教人口が実際の日本人口の２倍近くになっているのである。どうしてこんな現象が起きているのだろうか。そのわけは、一人の日本人が複数の宗教団体に登録されているからなのである。神社の氏子であり、お寺の檀家であり、新宗教の会員でもあるということが何の不思議もなく行われているのである。さすがにキリスト教系の団体では、そんなダブルブッキングは許されていないようだが、神社やお寺は二重、三重に所属していてもとやかく言うことはない。だから、最初の「あなたの宗教は何ですか？」という質問にすぐに「私の宗教はこれです」と答えがでないのは、そのような事情があるからなのである。いずれにせよ、この宗教年鑑の統計にあらわれているように、神道系の宗教が日本人の宗教生活に最も大きな影響を与えていることがお分かりになるだろう。

1.3.2.日本人の精神生活に対する影響

ここで、日本人の宗教に対する考え方や接し方をとりあげてみましょう。日本人に「あなたの宗教は何ですか？」と質問してみると、すぐには答えがかえってこないのである。そのために「日本人は無宗教だ」といわれるのですが、それは、日本ではあらゆる宗教が共存しているからなのです。神道は古代から現代につづいている日本の民族信仰である。

起源の時、農耕文化の進展とともに、自然の威力に神霊の存在を見出し、その神霊を丁重に祭ることで自然の脅威を和ませ、農耕生活の安寧を祈るという神観念が生じたことが、神道の始まりであった。

神道は、聖なる世界へ通ずる道は我々が住む世界にこそ見いだされる、という考えだ。神道の一番の特長は、ありのままの姿の自然とその永遠なる価値が直接結びついたシンプルさにある。日本の文化は今、世界中から注目を浴びている。

実は、神道は長い間、仏教信仰と混淆してきた（神仏習合）。一方で、日本における神仏習合は、すっかりと混ざり合って一つの宗教となったのではなく、部分的に合一しながらも、なおそれぞれで独立性が維持されていた側面もあり、宮中祭祀や伊勢神宮の祭祀では仏教の関与が除去されていることから、神祇信仰は仏教と異なる宗教システムとして自覚されながら並存していた。神道と仏教の違いについては、神道は地縁・血縁などで結ばれた共同体（部族や村など）を守ることを目的に信仰されてきたのに対し、仏教はおもに人々の安心立命や魂の救済、国家鎮護を求める目的で信仰されてきたという点で大きく相違する。

神道のもつ理念には、古代から培われてきた日本人の叡智や価値観が生きている。それは、鎮守の森に代表される自然を守り、自然と人間とがともに生きてゆくこと、祭りを通じて地域社会の和を保ち、一体感を高めてゆくこと、子孫の繁栄を願い、家庭から地域、さらには皇室をいただく日本という国の限りない発展を祈ることなどである。このような理念が、神々への信仰と一体となって神道が形づくられている。また、神道には、神々をまつる環境として、清浄を尊ぶという特徴がある。神社は常に清らかさが保たれ、祭りに参加する人たちは必ず心身を清める。これら神道の理念や特徴は、日本人の生き方に深く影響しているといえるだろう。

神道は、日本の民族宗教といわれ、日本人の暮らしにとけ込んでいる。たとえば、初詣や厄除、初宮参りや七五三、結婚式や地鎮祭など、神道の行事は日常生活のいたるところに見かけることができる。

このような日本独特の宗教共存を可能にしたのは、八百万の神々を崇拝する神道が基盤になったからである。神道には、

もともと包容性があり、客人（まれびと）を大切にして、異文化との接触による文化変容を可能にする素地があった。

１．４．第１章のまとめ

神道は、「多神教」と定義することができる。先に述べたように、カミを「ゴッド」と訳すのは、一神教における創造神に伴う考え方と混同しやすいため誤解を招きる。私たちは、kami とそのまま使うことをすすめている。説明的には deity(deities)と訳す。神道は汎神論ではない。なぜなら、この世のすべてのものが霊性を持っていることは認めるが、すべてが神として崇められるのではないからである。神として崇める対象に選ばれるのは、人間を超えた知恵や力などの霊的特性を示すものに限られる。神道は、絶対的な神あるいは全知全能の神を認めず、それぞれの霊的特性を持つ八百万の神々に対して崇敬を寄せるのである。

遠い祖先の時代から受け継がれて来た日本の伝統的な信仰である神道が求めるものは、自然とともに生き、祖先の心を己の心とし、人と平和に暮らすことである。自然と調和して生きることによって安心を見いだし、祖先の時代から受け継がれて来た伝統を尊重することによって精神的な支えを得て、人と人とをつなぐ絆を大切にして、より良い生き方を見いだすことができるのだと、日本人は昔から信じて来た。

第 2 章．神社と神社の建築の概要

2.1．神社の形成と発展歴史

街中の赤い鳥居、田んぼの中のこんもりした森、山の頂の小さな社、全国至るところに神社はある。神社のある風景、それは映画やドラマでもおなじみの、ごく身近な、しかし日本にしか見られない独特の風景である。

このような神社を中心とした、日本の神々への信仰が神道である。神道を信仰していなくても、七五三や初詣に神社を訪れたことがある人は多いだろう。

神社とは、神道の信仰で神々を祀るための建物や施設の総称である。

2.1.1．古代時期

神を祀る神社の起源は、神が降りるとされた「磐座（いわくら）」や、神が棲むと言われる場所で、神事を行う際に建てられた「神籬（ひもろぎ）」と言われるものである。神籬は建物と言うより、祭壇に近く、神事の際のみに設けられるものである。

古くは、神社としての建物や施設がなくても、山、滝、岩、森、巨木などに神が宿るとして、信仰の対象になった神聖なものがあり、それと生活の中に利用する山や木、森などとは区別していた。

奈良時代に入ると、律令制度が整いる。全国各地に沢山祀られた神社は鎮守の森であり、一同が会する場所だったので、朝廷は神社を組織化をする事により人々を掌握した。又、族の長でしたので、同族の人々が祀った神社は、より立派な神社として新たに再建されはじめた。そして、諸国の神社のうち、同族の神は国家神として認められ、それらの神社は「官社」と呼ばれた。

神社の原形は、神さまが降臨すると考えられた木や岩の所に仮設された建築物と考えられるが、時代の進展とともに次第に「やしろ」「みや」などと呼ばれる常設の社殿が造られた。

現在では 80.000 以上の神社が存在している。神社という単語は「神を祀る施設」という意味もあるので、神宮や大社も神社のひとつであると言えるだろう。

2.1.2.中世時期

室町の時代、場所に寺院を建てるための命令が始また。神道という宗教の本質的な祈願の根本は、とにかく国家安泰、無事平穏、庶民の末に至るまで須く安寧であるように、という事なのですが、強い戦国大名の国には一時的に安らぎの時間があったのではないでしょうか。

戦国大名はそれぞれの領内において社寺を整備し、門前市を挙げて経済的地盤を確保したわけですから、領内の有力社寺についてはむしろ、室町時代より安定していたのではないかと推測される。

戦国時代、寺院は経済的に自給自足であり、儀式的であり、戦争にも従事していた。戦国大名下における神社を取り巻く環境は、前時代よりあまり激変することはなかったわけであるが、神社仏閣の自営組織であった神人や僧兵などが、強大な勢力を持ち戦国大名のもとゲリラ的参戦を行なう場合もあり、あるいは完全な戦闘集団として戦国大名に交戦するときもあり、つとに比叡山の僧兵と織田信長の戦いは有名である。

また彼らは市の守護者としての役回りを持つ傍ら、市そのものを仕切る者達でもあり神社仏閣の経済基盤を担うものでもあったから、威勢の強い集団として時には乱暴狼藉もあり大名もその操縦手腕が問われたようである。

2.1.3. 江戸時代

太平の江戸時代ですが、社寺の所管については寺社奉行所により差配されていたのは周知の事実であるが、神社に比較して寺は本山末寺の関係が明確にして支配体制が確立しておった都合、その制度を神社の管理にも利用した点において、神仏習合の形が極まったということが言えると思う。

ここでできた社格としては、朝廷が奉幣した 22 の神社や、地方の有力な神社を「一宮」、「二宮」と呼ぶようになったもので、はっきりとした社格は作られない。

幕府は神祇制度や朝儀について基本的に尊重する姿勢をとった。

このような基本姿勢のもと、応仁の乱以降跡が絶えていた様々な儀式、祭事が復興し、神祇制度のみならず、社家の支配体制も次第に整えられ、吉田家と白河家を中心に神職をその支配下に置くという構造が確立した。

また由緒ある祭儀の復活と共に、徳川家康を祭った東照宮のように新たに崇拝の対象となった神社も生じてきたのである。

江戸時代の神社の特色は、家康を祭る東照宮が建立され、政治的に全国に分布を広げていったことである。

2.1.4.近現代時期

明治維新後に新しく作られた社格制度ができたものである。こちらは新たに、「官社」・「諸社」・「無格社」と表される。「官社」は祈年祭や新嘗祭の時に、国から奉幣を受ける神社のことで格式の高い社格となる。「諸社」は、「府県社」、「郷社」、「村社」に分類され、府県、市町村から奉幣を受けることで区別される。「無格社」は法的に認められた奉幣を受けない神社となる。

さらにまた近代においては、神社神道や教団神道が海外進出するようになった。これも以前には見られなかった新しい現象である。

また、習俗、人生儀礼、年中行事といった民族神道的な部分も、都市化、工業化などに伴う生活形態の変化によって、近代を通し少しずつ変容を迫られてきた。

民族神道的な部分は、近代文化の中で、かえってその根強さを示していると言える。

2.2.神社の建築

神道のユニークな特徴は、日本でしか見られないユニークな建築的特徴である寺院の建築である。その建築的特徴は、観光客を惹きつけ、写真家を惹きつけるだけでなく、日本文化の象徴にもなっている。

参道には、参拝の前に身を清めるための手水舎が設置されているのが一般的である。

このように神社を神域ととらえることから、死はケガレとされているため神社内で葬儀を行ったり墓地が建墓されることはない。

神道の神々を祀る社（やしろ）である「神社」は全国に約 8 万 5,000 社あり、その多くを民間法人である「神社本庁」が統括している。

神社の原形は、神様が降臨すると考えられた木や岩の所に仮設された建築物と考えられている。その後、時代が進むにつれて「やしろ」「みや」などと呼ばれる常設の社殿が造られた。

2.2.1. 神社の建築構成

2.2.1.1. 鳥居

神社に入ると、まず「鳥居」という意味の鳥居の入り口がある。神の神殿の構造において、鳥居は人間の世界と神々の土地を隔てる門を象徴しており、人間が聖地に行くことを暗示している。

鳥居には多くの種類があり、現在は主に約 20 種類が収録されている。最も古い鳥居は非常にシンプルな構造をしている。それは、典型的なサイズの屋根裏部屋の 2 つの梁の上にある、2 つの不十分にトリミングされた森林の木である 2 つの柱で構成されている。上の棒は下の棒よりも長く、棒の両端はわずかに面取りされている。2 つの柱の真ん中には、2 つの梁をつなぐ小さな柱がある。その後、柱と梁は平滑化されたが、塗装はされていない。鳥居が赤く塗られ、その構造がますます精巧になったのは、日本の建築が中国文化の影響を明確に受けたときだけた。最も有名なのは広島県の厳島神社である。水に鳥居が浮かぶお寺は初めて,特に、京都の伏見稲荷大社には、山麓から寺院まで 4km にわたって 10,000 本を超える鳥居が連なっている。建築部品は多くの鮮やかな色で塗装されている。この形式は、仏教が支配的だった時代に人気があった。

最初の層の彫像の後、本堂に向かう途中で、さらに 2 層の彫像に出会うことができる。一等は修行官で、弓を手に、刀を背負い、門の方を向いている。これらは、神道の伝統的な守護神である。最も一般的な彫像の最も内側のクラスは、犬とライオンである。もちろん、神社にはこの二匹だけではない。例えば、日光では猿が建築装飾のメインテーマになっている。

2.2.1.2. 本殿（神殿）と拝殿

神社の本殿は実に多様である。神を祀る本殿は通常行くことができないため、神社に参拝する人は「拝殿」という場所でお参りをする。お賽銭を入れたり、祈祷やお祓いを受ける場所としても知られている。

また、本殿と拝殿を繋ぎ、お供えものをする場所である「幣殿（へいでん）」が設置されている場合もある。しかし、どのような様式で作られようと、2 つの部分に分ける必要がある。外側の部分は供物を展示するために使用され、司祭が神々への儀式を行う場所でもある。

拝殿の奥は禁断の御殿で、一年中扉が閉ざされており、本殿と呼ばれる神々が住まう場所である。神社の御神体を祀っている場所を本殿または神殿と呼ぶ。神社で最も重要な場所であると共に、神が宿る神聖な場所であることから、通常人の目に触れることがないように配置されている。

場合によっては、本殿と社殿の間に奉納物をつなぐ場所である「拝殿」もある。

上記の主な作品に加えて、神道建築の地盤では、地元の歴史的出来事、寺院の建設の歴史を記録するために使用される記念碑も見られる。崇拝者の石碑が置かれている場所である。お土産店。いくつかの寺院では、神聖な木にも出会う。

2.2.1.3. 屋根

神道建築の最大の特徴は、地木と鰹木という 2 つの部分からなる屋根飾りである。Chigi は、切妻に大きな V を形成するために上方に延長された切妻の端にある 2 つの端垂木である。かつおぎは、両端が先細りになっている短い木製のスラットで、屋根を保護するために屋根の屋根に水平に配置される。かつおぎは、瓦屋根に瓦を這わせる役割がある。

伝統的な神社の屋根には、3、4、5、10 の鰹木バーがある。カツオギとは、比喩的な意味での魚の干物である。神道の信者の観点からは、屋根の上に智木と鰹木がある寺院は、屋根の上にそれらのない寺院よりも神聖で神秘的である。千木と鰹木は、伝統的な神道建築の典型と見なされるだけでなく、神道の象徴として見られることもある。伝統的な神道建築の屋根がややシンプルであるとすれば、中国建築の影響を受けた寺院の屋根は、より多様で洗練され、カラフルである。

2.2.1.4. フレーム

「コンチネンタル」アーキテクチャには、より複雑なスケルトン構造がある。まず、それぞれの列の数である。これは、ポーチの列を数えずに、4 から 6 列を超えているためである。そのため、室内開口部は従来モデルよりも大幅に大きくなっている。地面から屋根まで立っていた柱はもうなくない。屋根を上げるために、人々は互いにリンクされた梁の上に配置された短い柱の助けを借りて、層ごとに積み重ねられた多くの梁の層を使用し、システムの上にフレームセットを形成する。女性の柱.この構造により、柱の木材が大幅に削減され、家のフレームが軽くなる。この構造の第 2 の技術的特徴は、屋根を支えるために伸びる柱と梁の上部に配置された「doingcon」のシステムの外観である。このシステムは、技術的な役割だけでなく、非常に特別な装飾効果も果たすように、ますます繊細に開発されてきた。これらの建築コンポーネントはすべて塗装されている。しかし、「大陸」から輸入された新しい建築様式は、日本の地理的条件や地震条件により適しているとはいえ、神社が国の建築様式に従っているわけではない。それどころか、先住民族の文化がしっかりと存在している証拠として存続している。そして、日本文化が他文化の要素を吸収する際に、固有の文化的アイデンティティを豊かにするために常に慎重に選択するというもう一つの奇跡がある。

2.2.2. 地方の神社と国家の神社

2.2.2.1. 地方の神社

地元の寺院は他の神社と似ているが、通常は小さな神社で、規模も小さいである。また、小さな寺院では大規模な儀式が行われることはめったになく、鳥居もほとんどない。寺院の管理者も少ない。小さな神社は 3 年 7 年に儀式を行うことができるが、通常、結婚式は行かない。

日本全国にたくさんある神社の中で、古来、特別な神社として敬われてきたのが伊勢の神宮である。伊勢の神宮は、正式には神宮とのみ申し上げ、三重県伊勢市とその周辺に鎮座する 125 のお社の総称である。

その中心は、皇室のご祖先である天照大御神をおまつりする皇大神宮（内宮）と、天照大御神のお食事をつかさどり、衣食住はじめ産業の守り神である豊受大御神をおまつりする豊受大神宮（外宮）である。

今から 2000 年以上前の第 11 代垂仁天皇の御代、天照大御神のお告げにより皇大神宮がまつられ、約 500 年後の第 21 代雄略天皇の御代には、豊受大御神が伊勢に迎えられた。

神宮では年間約 1500 回ものお祭りが行われているが、神宮の、また日本国中で最高最大のお祭りは式年遷宮というお祭りである。式年遷宮は、20 年に一度すべてのご社殿をはじめ御装束・神宝などを新しく造り替えるお祭りで、そうすることでみずみずしさを保ち、ご神威が高まることを願ってきたのである。

氏神さまは、鎮守さま、産土さまともいう。氏神さまに対して、その地域に住んでいる人すべてを氏子といいる。たとえば、〇〇神社は××町の氏神、××町の住民は〇〇神社の氏子というような表現をする。氏神のもともとの意味は、氏族、つまり血縁で結ばれた一族の守り神でた。

それは、氏族が一定の地域に集団で暮らし、神々をまつっていた古代社会の名残である。それが、時代が下るにつれて、地域の守り神へと変遷してきたのである。

氏神さまは、もっとも身近な神さまである。神社に参拝するときには、まず氏神さまにお参りしよう。

神社でおまつりされる神さまについて：各地の神社におまつりされている神さまは、地域の人々から地域の守り神として篤く崇敬されてきた。ですからその土地の名前を取って「〇〇さま」、また親しみを込めて「〇〇さん」とお呼びすることも多いだろう。お稲荷さまは主に宇迦之御魂神ウカノミタマノカミをおまつりする神社である。

「稲荷」の語源は、イネナリ（稲成）という意味で、稲の生成化育する神様を表している。また神さまが稲を荷なわられたことから、稲荷の字を宛てたともいわれている。もともとは農業の神様でたが、今は広く商業・産業を守護する神さまとされている。

海洋と人格の神の神殿：住吉さまは、伊邪那岐命が禊をおこなった際に生まれた底筒之男命（そこつつのおのみこと）・中筒之男命（なかつつのおのみこと）・表筒之男命（うわつつのおのみこと）をおまつりする神社です。時には神功皇后もおまつりされている。

神功皇后が新羅出征した際に、住吉さまの御加護により、無事に戦勝を果たしたという記事が古事記と日本書紀にはみられる。そのことから海上安全守護の神さまとして、海にまつわる漁業・水にまつわる農耕の神さまとして、また和歌の神さまとしても広く信仰されている。

2.2.2.2.国家の神社

一般にいう神明さまは、伊勢の神宮でまつられている天照大御神を各地におまつりする神社である。天照大御神をおまつりする神社としては他に、大神宮・伊勢神社・天祖神社などがある。

また神明という言葉は、広く神さまを意味する場合もある。さまは、応神天皇（第十五代天皇）・神功皇后をはじめとする神さまたちをおまつりする神社である。

京都府の石清水八幡宮では源義家が元服をし、「八幡太郎」と称するなど源氏の篤い崇敬を受けた。さらに源頼朝により鎌倉幕府が開かれてからは、鶴岡八幡宮への信仰が高まり、武家の守護神として各地にお祭りされるようになったのである。

天神さまは、菅原道真公をおまつりする神社である。道真公は平安時代の学者で、右大臣まで務めましたが、遠く大宰府（現在の福岡県太宰府市）に左遷され、59 歳のときに亡くなった。やがてその墓所が整えられ、現在の太宰府天満宮となったのである。

道真公が亡くなった後、京の都でも手厚くおまつりしたのが、北野天満宮の始まりである。

道真公は英知に秀でていたことから、学問の神さまとして信仰を集めている。

お諏訪さまは、建御名方神(たけみなかたのかみ)をおまつりする神社で、お妃である八坂刀売神(やさかとめのかみ)もおまつりされる場合もある。

『古事記』によると、大国主命(おおくにぬしのみこと)の御子神である建御名方神は、天孫降臨に先立ち国譲りの交渉にやってきた建御雷神(たけみかづちのかみ)との力競べに負けて敗走し、信濃国の洲羽海

（すわのうみ）（現在の諏訪湖）に追いつめられ降参しました。その諏訪の地にまつられたのが諏訪大社である。

中世には武勇の神として武家の崇敬を集めた。また風雨の神、鍛冶の神、農耕・狩猟・開拓の守護神といった幅広い御神格を有し、後世、諏訪神社は信濃国のみならず各地に奉祀され、庶民からも篤く信仰されるようになったのである。

2.3.神社で行われる儀礼・祭り

2.3.1. 神道の儀式を行う官人

2.3.1.1.神主（Thần chủ - Chủ tế）

かつては、生け贄は各家の族長に割り当てられ、神の所有者でもあった。氏族が合併して大きなブロックに拡大するにつれて、主要な家族が出現する。この家族は、神々を崇拝するすべての儀式を行う家族を選ぶ。犠牲は普遍的なものではなく、その家族の仕事であり、神々の直系の子孫と見なされる。

神様の仕事は、神道の儀式や祭りや儀式をどのように行うかを知り、理解することである。神主になりたい人は、神社本庁が主催する講座に参加したり、他の神々から学んだりする人が多いである。卒業生は、地元の寺院で神主として働きたい場合、神社本庁によって任命される。

祭りや儀式が始まる前に、神主は精神的に儀式の準備をするために自分自身を閉じ込めていた。彼らはきれいにシャワーを浴び、清潔な（白い）服を着、肉を食べることを避け、特定のものだけを食べ、心を安らかに保つ。攻撃的または無礼な行為は、彼らの主権を失う原因となる。

2.3.1.2.女帝(Nữ tư tế)

伝統的な神々のほとんどは男性ですが、神道は女性が神になることを禁じていない。日本が皇后によって統治されていた時、彼女に（伊勢神宮の）主祭の地位が与えられた。第二次世界大戦中、ほとんどの男性が戦争に行き、妻子は家で神事に関連する仕事をし、多くの女性が大きな寺院を担当していた。今日、神事における女性または男性の役割と位置は同じであり、男性と女性の好みの問題はないが、依然として男性が過半数を占めている。

2.3.1.3.巫女（みこ- Vu nữ）

多くの寺院では、領主のほかに、寺院の活動に参加する巫女がいる。巫女は若い処女の女性で、多くの場合領主の娘であり、巫女舞と呼ばれる古代の寺院の踊りを学び、儀式で披露するほか、お守りを販売したり、寺院の敷地や神社を掃除したりする。彼らの服装は白い着物に赤い袴で、しばしば竹のほうきを持って庭を掃除する。

結婚すると巫女の仕事は終わり、その地位は誰かに譲られる。現在、ほとんどの巫女はアルバイトやボランティアとして雇われている女子高生である。彼らの任務は、寺院の機能を支援し、儀式の踊りを行い、おみくじ(一種の占い)を配布し、寺院の店で奉仕することである。

2.3.2.人生に関する儀礼

現在、神社で行われているお祭りに、大きく分けて次の 2 種類がある。

＋神社自体が行う祭り

＋氏子崇敬者の依頼に基づき行われる祭り。

神社自体が行う祭りには、その軽重によって大祭、中祭、小祭、諸祭に分けられる。大祭には例祭や祈年祭、新嘗祭のほか神社のご鎮座に関わるお祭りが、中祭は歳旦祭、元始祭、紀元祭、昭和祭、神嘗奉祝祭、明治祭、天長祭など皇室と関わりの深いお祭りが区分されている。

氏子崇敬者の依頼に基づき行われる祭りは、入学・卒業や就職や人生の節目に関わる報告祭・祈願祭などが挙げられ、神社によっては諸祭として行われる。また家内安全や商売繁盛、安産、病気平癒、厄除けなどの諸祈願、さらにはお宮参りや七五三参りなどもこれにあたる。

いずれも神様に神饌を捧げることでしてご接待を行い、神様に喜んでいただき、祝詞を奏上することで神様のご神徳をいただいて、皇室を始め天下、地域の安寧と発展、さらには願い事をする氏子崇敬者の繁栄をいのるものなのである。

人は誕生してからその生涯を通して、様々な儀礼を経験する。

人の健康や安全を神様に祈る人生儀礼は、古来より続く伝統的日本文化であり、我々日本人にごく自然に継承され、親から子へと受け継がれ、今日に至っている。

各地域によって年齢、性別、期間等異なるが、代表的な人生儀礼をご紹介いたする。

2.3.2.1.初宮詣

子供が無事誕生し、今後の成長を祈ると共に氏神様に顔を見て戴くと言う二つの意味がある。

おおよそ生後３０日を過ぎた頃、氏神様にお参りする。又、生後１００日にお参りする地域もある。

2.3.2.2. 七五三詣

三才、五才、七才の子供が氏神様に詣り、その成長の段階によって御礼参りをして今後の成長を祈る。

三才を髪置（男子・女子）、五才を袴着（男子）、七才を帯解（女子）と称する。

2.3.2.3. 厄年祓

厄年は人の生涯の節目として平安時代の記録にも書かれている。古くから言い伝えられている。一定の年齢に達し、社会的にも重要な役割を担うようになるころは、それと相俟って心身の苦労・病気・災厄が起りがちであり、人生の転換期として注意すべき年巡りとして、自覚と慎みが必要な時期である。一般に男性は数え年２５歳、４２歳、６１歳、女性は１９歳、３３歳と３７歳を厄年といい、特に男性４２歳、女性３３歳は一生のうちの大厄といわれ、前年を前厄、当年を本厄、翌年を後厄として、３年間を忌み慎しむ慣わしとなっている。災厄に遭わないよう心がけ、年頭に神社に詣でて厄祓いを行いる。（近年は女性１９歳、男性２５歳などの小厄についてもその前後の年を前厄・後厄としてお祓いされる方が多くなってきた。）

厄祓いによって厄が転じて福となるという考え方は日本古来のもので、かつては厄祝いともいわれた。厄祓いの意味で親類知友を招待して宴席を設け、神社に物を奉納するなどが昔から行われている。日常の多事多忙に流されるなかで自己反省するのに好適な機会といえる。

成長に合わせた人生儀礼の他に、入学・卒業・就職など生活環境が変わる時も、人生の大きな節目である。

つまり、神社へ行く目的は神様のご加護をいただき、無事に過ごせるようにお願いだろう。

2.3.3. 年中の祭りと行事

2.3.3.1.元旦祭（1月1日）

年頭にあたり御皇室の弥栄、国家の繁栄、氏子崇敬者の安寧を祈る。このお祭りの後、個人又は会社等の初祈祷が奉仕される。筑波山山頂では太平洋から昇るご来光を拝む方々が朝早くから登山する。

2.3.3.2.成人祭(1月第2月曜日)

満 20 歳になった男女が国や社会に対する責任を自覚し神前でその誓いをたてる。

昔、男子は髪形や衣服を改めて元服をし、女子は着物の紐を帯にかえる儀式をして成人とした。

2.3.3.3.年越祭(2月10日・11日)

（としこしさい）

このお祭りは元来旧暦正月 14 日に追儺式（豆まき）を行っていた。14 日は小正月の晦日にあたりその年初めての満月（十五夜）を迎える。そこで神社でお祓いを受け心身を清めた年男が福男となり福を与える為、福豆とともに多くの福物を撒き、満々たる月の如く一年の一陽来復・家内安全・身体安全・除災招福・厄除けなどを祈願する祭礼である。ご奉仕戴く年男は厄年や生まれ年の方に限らず毎年つづけて奉仕いたする。これが他の社寺で行われている節分とは異なるところである。現在は 2 月 10 日・11 日の二日間にわたり、約 600 名の年男年女が参加し盛大に斎行される。

2.3.3.4.祈年祭（きねんさい）2月17

穀物の豊穣を祈るとともに国家の安泰を祈請する祭りで、日本の稲作を中心とする農耕文化を基盤として成立した祭りであるが、今日ではさまざまな産業の繁栄も祈る祭りである。

2.3.3.5.天長祭(2月23日)

天皇誕生日を祝い、天のとこしえなることを祈る。

2.3.3.6.皇霊殿遥拝式（こうれいでんようはいしき）

彼岸の中日に天皇自ら皇霊殿で歴代の天皇の皇霊を祀られる宮中大祭で、当日は神社で遥拝式が行われる。

2.3.3.7.御座替祭（ござたいさい）（4月1日・11月1日）

筑波山神社の例大祭で、筑波山最大で重要な祭りである。この祭りは、一般に夏と冬親子の神が山頂の御本殿と中腹の拝殿で神座が変わるといわれている。実際の祭りの内容は、御本殿の神衣祭（かんみそさい：神様の衣替え）。

拝殿の奉幣祭（ほうべいさい：幣帛をたてまつる）。神幸祭（じんこうさい：山頂神衣祭で撤せられた御神威が満ち満ちた前期の神衣を神輿に納め氏子区域を渡御し、地域の発展と家々の平穏を祈る。）この三つのお祭りの総称である。この日に限り、三代将軍家光公奉納の御神橋（県指定文化財）を渡ることができる。元来は冬至と夏至に行われていた。

2.3.3.8.新嘗祭（にいなめさい）11月23日

新穀をお供えし、収穫を神恩に感謝する祭りである。

2. 3. 3. 9. 大祓（おおはらい）6 月 30 日・12 月 31 日

わが国上代より行われている神事である。世の全ての罪穢れを祓い清め、国家の安寧と皆様の幸せを祈るお祭りである。

B2. 神道の祭り事と祝日の関係

祭祀	時期	祝祭日
■歳旦祭（新年を祝う）／四方節（八百万の神々への遥拝）	1 月 1 日	元旦
■紀元節（建国を祝う）	2 月 11 日	建国記念の日
■春季例祭（五穀豊穣の祈念）・春季皇霊祭（天皇や皇族の忌日）	3 月春分	春分の日
■旧天長節（昭和天皇の誕生日）	4 月 29 日	昭和の日
■旧天長節（明治天皇の誕生日）	11 月 3 日	文化の日※偶然とも言われる
■秋季例祭（五穀豊穣の感謝）・秋季皇霊祭（天皇や皇族の忌日）	11 月秋分	秋分の日
■新嘗祭（新穀を祝う日）	11 月 23 日	勤労感謝の日
■ 天長節（今上天皇の誕生日）	12 月 23 日	天皇誕生日

これらの祭祀は実際、宮中をはじめ、多くの神社でも今なお執り行われておる。私たちの多くは単なる「公休日」という感覚しか持ち合わせていないが、実際には、今なお太古から続く文化は今なお息づいているのである。中でも、「建国記念の日」は、その創建の意味を

知らなくなっておるが、もとは、神武天皇という初代天皇の即位を讃える日となる。その創建年数は 2675 年（平成 25 年時）という時を刻み、「皇紀」という紀年法を用いて表す。

２．４． 神社参拝のマナー

神社参拝の際には、服装や歩き方など、いくつか押さえるべきマナーがある。

《神社参拝の服装》

神社を参拝する際は、できる限り服装を正すようにしよう。特に社殿などの特別な場所に立ち入る場合は、男性はスーツ、女性も同等のフォーマルファッションを必要とされることもある。

《参道の歩き方》

参道の中央は神様が通る道（正中）と考えられている。そのため、参道の中央を避けて神様への敬意を表すのが望ましい歩き方である。参道の中央を横切るときは、軽く頭を下げながら、もしくは中央で神前に向き、一礼してから横切るなど神様に敬意を表しよう。

神社参拝の正しい手順

次に、礼拝の正しい手順も確認しておきよう。

《1. 鳥居の前で一礼する》

鳥居は神様の住む場所と、人間の住む場所を区切る境界である。神様への敬意を込めて一礼してから足を踏み入れて。帽子は必ず取り、寒い時期でなければコートも脱ぐのが望ましい。

参拝が終わった後も、鳥居を出たところで振り返り、社殿に向かって一礼をしよう。

《2. 手水舎（ちょうずや）で清める》

神聖な場所に入る前に心身を清める。この清める場所が手水舎である。鳥居をくぐった後は、手水舎で身を清める。

・右手で柄杓に水を汲み、左手→右手の順番に手を洗う。

・次に右手で柄杓を持ち、左手に水を受けて口に含んですすごう。

・終わったら、もう一度左手を洗う。

・最後に、柄杓を縦にするようにして柄の部分を清めて、元の場所に戻す。

・濡れた手はそのままにせず、ハンカチで拭いて。

《3.お賽銭、鈴、二拝二拍手一拝の順》

参道の端を通って拝殿前まで来たら、まずはお賽銭を賽銭箱に入れる。お賽銭は神様に捧げる真心の表れであり、金額は関係ない。次に鈴を 1 回鳴らし、二拝二拍手一拝（にはいにはくしゅいっぱい）で拝礼する。まずは 2 度頭を下げる。このとき、90 度くらい深々と頭を下げるのが望ましい。続いて 2 回手を打ち鳴らし、合唱のポーズのまま心の中で願い事を唱えよう。願い事を唱え終わったら、もう 1 度深く頭を下げる。

2.5. 第 2 章のまとめ

本来、日本人の自然観は、畏敬の念をもって神々の世界としての山や森、 川や海に接することであった。こうした態度はおそらく日本の土地が青々としていて海に囲まれ、比較的温和な気候とはっきりした四季に恵まれているせいでもあるが、ともかく日本人は自然を征服すべき敵としてではなく、慎みをもって接すべき神々の恵みあふれる聖なる空間として見たのである。

人間を自然の一部として扱い、自然は人間の仲間であり、血肉を分けた兄弟姉妹であると考える。これは、まさに、東アジアの仙や道につながる思想や哲学にほかならない。つまり土着の民俗宗教（信仰）の考え方である。

第 3 章．日本の神道-ベトナムの城隍神信仰との対照

3.1．城隍神信仰の概要

3.1.1．由来と発展歴史

熱帯モンスーン気候の土地に住んでいるベトナムの人々は、昔から農業で生計を立ててきた。自然と共に生活を送っているで、土の神、水の神、稲の神をあがめてきた。そして、ベトナム人は、これらの神様を母親として考え、古代ベトナム人は、大自然を自分の母として奉っていた。

ベトナムの田舎の村では、シタデルは神聖な信仰であり、何世代にもわたってコミュニティの精神的な支えとなっている。シタデルを崇拝することは先祖崇拝に似ており、強い精神的な痕跡を持ち、ベトナム人の「水を飲み、源を思い出す」という概念を表現している。

タインホアン(城隍)とは、民衆や国家のために功をなした人物で、外敵を退けたり、ランやアプ（註４）を築いたり、職業を生み出して、村人に尊敬されている。各王朝の下にあっては、タインホアン(城隍)は国家のために功があったとして、爵位勲等を与えられた。ベトナム人は故郷を離れても行く先々で、神社を立て、自身のタインホアン(城隍)を祭ってきたのである。

「城隍信仰は先史時代から今日まで、ベトナム民族の発展と共に歩んできた。ベトナム人にとって、城隍信仰は非常に重要な意味を持っている。森で生活を送った先史時代に、古代ベトナム人は森の神を崇拝し、のちに、平野に移ってからも、母親を崇拝する信仰が生まれました。」

皇帝は古代中国に現れ、城隍、宮殿、州または郡の守護神として崇拝された。古代中国の社会は、王と侯の 2 つのレベルに分かれていた。周王朝の王は家臣を統治し、各家臣は城隍と多くの田舎の集落に囲まれたほとんど小さな王国であった。したがって、城隍を守るために城隍があり、集落を守るために地球の土地がある。皇帝崇拝は古代中国全土に広まっていた。シタデルが建てられるところには、塹壕が掘られ、シタデルがある。シタデルは通常、王によって寺院または称号を与えられる。中国の封建政府は、皇帝の崇拝を人々の教育に利用した。

神崇拝の信仰は中国に起源を持つが、中国の古代の村の規模と構造はベトナムの古代の村とは異なるため、古代のベトナムの村の信仰は古代のベトナムの村の信仰と同じではない。古代中国の村。

城隍（Thành hoàng）はベトナム北部のキン族村落生活においては最上の神であるが、それが具体的な一地域の特殊な土地神であることは明白である。キン族の南への移住は城隍の「名称」をもたらしただけである。かつて、以前の主人が信仰していた在地神を持つその地域では、キン族は、在地の母神信仰要素を追加しながら、村落生活における普遍性をもつ信仰対象を形成する必要があった。地元の信仰要素は、キン族村落の城隍名称要素とともに本土／本境／本社（Bổn Thổ/Bản Cảnh/Bản Xã）に転化させて、全ての村落に普及する本土城隍神（vị thần Bổn Thổ Thành Hoàng）となった。しかしそれは実体のない名称であった。なぜならその神の容貌や性質を素描することが全く容易でなかったことからもわかる。

ベトナム中部のキン族の神々は、ベトナム北部を発祥地としてもたらされた。また村落成立史に功績 のあった人物が尊崇されたが、そ

の典型が開耕開墾神（vị Khai canh Khai khẩn）である。　キン族村落の城隍がベトナム中部にやってきたとき、故郷と同じような十分な容姿と威信を備えてお らず、純粋に名称を保持しているだけで、曖昧で明確さに欠けていた。ベトナム北部デルタ地域と同様 に時間を経たのち、村落共同体は人民の神霊信仰要求に対応し、国家は君主中央主権制を強化すること になる。そして阮朝期になると、信仰対象の歴史化、具体化が適用されることになった。

多くのベトナムの村のシタデルの崇拝は、自然の力（川の神、山の神、雷の神、稲妻の神、雲の神、雨の神など）の崇拝である場合がある。これらの神のうち、どこにどのような神を祀るかは、その村の特性によって異なる。たとえば、川の両側にある村では水の神々が崇拝されることがよくある。山腹の村では山神（山神）を祀ることが多いである。

一部の村では、バチュン、バトリウ、レホアン、ドゥオンディンゲ、レヴァンティン、トーヒエンなど、外国の侵略者を撃退し、国家の独立を回復することに貢献した国民的英雄として村の城隍を作る歴史上の人物を崇拝している。BàTrưng,BàTriệu,LêHoàn,DươngĐìnhNghệ,LêVănThịnh,TôHiến Thành,LýThườngKiệt,TrầnNhậtDuật,..

一部の村では、村人に特定の工芸品を教えたとされる神を崇拝している。たとえば、バッチャン陶器の祖先、フーランの村はフアヴィンキエウ、ダイバイのブロンズ鋳造の祖先はクアンのグエンコントゥルイエンである。彼の父はグエン・コン・ゲ、..

一部の村では、かつてわが国を治めていた北方の官僚を、チュウダ、シニエップ、カオビエン、ダオホアンなどの守護皇帝として崇拝している。

ここで特別な点とは、ベトナムの神々がまさしく豊富で多様な起源を有し、自然神や人神を含み、海洋文化や在地文化の痕跡が残っている神様である。

「城隍信仰は大自然の女神を崇拝するというベトナム人の信仰から生まれたと言える。この信仰は先祖の崇拝、国に功労がある人物の崇拝につながっている。特に、この信仰は国の独立と自由を勝ち取ることに大きく貢献してきた英雄も奉っている。」

阮朝末期、村落の神社は、開拓者の血族集団の始祖を祀ることから始まる人神の出現によって、大きな変化をともなった。人神の一部は、さらに結合されて、正式に勅封状により、村の城隍に格上げさせられた。おそらく、その信仰は早い時期から村落共同体で実践されていたが、19世紀末から20世紀初頭になって、朝廷が勅封状を贈与することでようやく正式に承認される。

この信仰は、土地の神にも昇進や左遷もあるとされ、功績や失敗でより高い地位の土地神とされたり、低い地位の神にされたりすると考えられていた。ベトナムの慣習書によると、各村は神の皇帝に仕えている。 2 つまたは 3 つの神を崇拝する村があり、総称して Phuc Than（祝福された神）として知られる 5 つまたは 7 つの神を崇拝する村がある。

また、城隍信仰はベトナム各地に神殿があり、彫刻や建築、音楽、舞踊などの多様な文化的、芸術的要素が含まれている。他の宗教は死後の世界に向いているものが多いようですが、城隍道は現在の生活を考え

るということである。この現世における人々の健康と豊かな暮らしを祈願する。

*3.1.2.亭の建築（*村の鎮守社兼集会所）

いくつかの歴史的な情報源に基づいて、それは 11 世紀からのものである可能性があります-1000 年にわたる中国の封建支配の後、ベトナム人が独立を取り戻したとき、多くの神々が共同住宅で崇拝された。後に共同住宅と呼ばれるようになった。ベトナムの各村には共同住宅がある。以前は、村の共同住宅は、村人の崇拝と集会の場所であるだけでなく、村の行政本部、公有地、公有地などを分割する長老評議会の会合場所でもあった。経済の中心地、政治、村の文化。共同住宅は、ベトナムの社会生活において特に重要な位置を占めていると言える。したがって、作家のグエン・ダン・トゥクは、封建時代のベトナム文化を指すために「共同体文化」という用語を始めた。彼によると、ベトナムの伝統文化全体が共同住宅の屋根の下に収束する場合、その文化を「村の共同住宅の教会」と呼んでみませんか。

学者のグエン・ヴァン・トーによると、一時停止の始まりは村人が集まる場所であり、国王の布告や勅令を掛ける場所だった。神天皇を崇拝するために、多くの村が神社を建てた。そして、リスの日（月の初日）と希望の日（満月の日）の慣習に従って、村人は寺院に来て温式を行う。（敬意を払うという意味）。この神社は、精神が保存されている「Nghe」としても知られている。生贄の日に、村人たちは寺院から亭まで行列を作って生贄を祝い、それを寺院に持ち帰る。簡単に言えば、多くの村が大きな亭を建てただけで、外は集会所（家族の家）、中は神社である。

城塞と人々の集会所を崇拝する機能を備えた村の亭は、おそらく楽王朝の初期に始まり、マック王朝で形になった.おそらく、15 世紀後

半の儒教の発展により、シタデルは亭に徐々に移植された。しかし、現在、亭の最も初期の痕跡であるシタデルは、16 世紀にのみ出現し、以前は、亭には通常 3 つのコンパートメントと 2 つの翼しかなかった。身廊には屋台がなく、天皇を祀るホールである。 17 世紀末、中期以降はマレット ハンドルと呼ばれ、亭にディン フォント スタイルを与えた。 17 世紀末、特に 18 世紀には、村の亭に犠牲前庭が追加された。

亭は、典型的な建築遺物であり、君主制の民俗芸術の最も輝かしい発展の世紀-の文化的産物である。その彫刻は非常に価値があり、深い国民性を示しており、人物から動物まで、様々なテーマで描かれている。これらの歴史的、建築的価値により、多くの亭は国家歴史文化財に指定された。

伝統的な建築は、風水の原則に基づいて構築されている。亭の場所は寺院とは異なる。パゴダや寺院は静かな場所を好み、時には孤独で邪魔にならない場所を好みるが、亭は主に中央の場所を占めています。理想的には、亭は川を見下ろす開放的な場所にある。自然の池がない場合、村人は亭の前に水をためるために井戸を掘って「水を集める」ことがある。木造建築には、装飾的で彫刻的な要素が含まれている。

亭は通常、大きな岩の上に大きくてまっすぐな木製の柱が置かれた、大きくて広い家です。というのも、亭のトラス、クロスバー、縦梁、母屋もアイアンウッドのような良質な木材で作られているからです。家の壁はレンガでできている。

村の亭の柱枠:柱-梁-ラインのシステム、村の亭とその構造は、村の亭の最も重要な構成要素であり、村の亭の創意工夫、知性、熟練した手を示している。ベトナムの農民と職人.柱-梁-線のシステムは垂直コンポーネント（柱、軍事柱、ポーチ柱）

の 3 次元リンケージシステムである。水平（上ビーム、下ビーム、脇ビーム、第一文、ルオン...）。垂直(線、フロック、垂木など)。コンポーネントは二重のほぞでしっかりと接続されていると同時に、分解、損傷したコンポーネントの交換、またはファミリの持ち上げや回転が必要な場合に非常に柔軟である。村の亭の長さに沿って柱をつなぐのは、2 つの軍事柱を接続する上部ビーム、2 つのポーチ柱の 2 つの端を接続する下部ビームを含む、水平ビームのシステムである。水平リンクには、ルーフダイアフラム(上部レベル)からルーフシップである最下部のダイアフラムまでのダイアフラムのシステムが含まれている必要がある。

村の亭の屋根：亭の屋根は、瓦の鼻瓦で覆われ、端に 2 つの切妻が建てられているか、4 つの角が湾曲しています。亭の屋根には二匹の月を慕う龍がおり、その風習は「月を慕う二匹の龍」または「二匹の龍が真珠をめぐって争う」と呼ばれている。村の村の亭の屋根は表面的で、広くて低い 2 つの主屋根に広がり、2 つの屋根が 2 つの翼を覆っている。屋根の高さは通常、家の高さの 2/3 を占める。村の亭の屋根の最も特別なマークは、共同ナイフである。2 つの主屋根と 2 つの切妻屋根が合わさって湾曲した海岸線を形成し、その後、花の咲くように 4 方向すべてに緩やかに湾曲し、村の亭の屋根が空中に浮いているように見える。船の形をした湾曲した屋根は、ベトナム固有の建築の特徴であり、中国、日本、韓国の建築と比較するための基礎となっている。。。

建物を覆う主な素材はタイルである。瓦は、機能によって屋根瓦と裏瓦の 2 種類に分けられる。屋根瓦（湾曲したもの、

覆瓦と呼ばれる）は、喜鼻牌、竜鱗牌、ディ牌、リスト牌など、多くの種類がある平凡な牌である。喜劇鼻牌とは、喜劇の鼻のように爪の鼻が高い牌の一種である。鼻の部分には排水溝が入っていることが多く、装飾的な効果がある。鼻の部分に模様が彫られていることもある。

村の亭の床システム:村の亭の床システムは、1 つの列の列を接続する垂直ビーム、異なる列の列を接続する水平ビームを含む、村の亭の柱に取り付けられた頑丈な木製の梁で設定される。上部は、滑らかな、厚さ 2～3cm の平らな木の板で舗装されている。村の亭の床の高さはそれぞれ異なるが、通常は 50～80cm 程度である。村の亭の床の下は空のままにして換気し、床を乾燥させる。空の身廊を除いて、村の亭の床は両側から木材で舗装され、いくつかのレベルに分割され、徐々に 2 つの翼に上昇する。各レベルの高さは 10～15cm である。会議では、村人たちは村の亭の床のレベルに応じて席を分ける。

中庭はタイル張り。亭の前には 2 本の高い柱があり、亭にはゲの絵が彫られている。亭の身廊には祭壇があり、タインホアンと呼ばれる村の神が祀られている。亭にも女性の太鼓が置かれ、5 回連続のリズムに合わせて演奏され、村人に亭に戻って村の問題について話し合うように促する。多くの亭にはスクリーンがあり、最も一般的な彫刻は龍馬プロジェクトまたは町を見下ろす虎のイメージである(南部では、オン・ホーの石碑と呼ばれる)。

ベトナムの亭は、その歴史的価値だけでなく、古代人の才能と大らかな建築装飾芸術のために、世界中の観光客や研究者を魅了している。建物全体は、古代の優雅な建築を背景にして

作られた貴重な木彫りのコレクションである。ベトナムの亭の装飾芸術は、主にその美しさを発揮する条件のある場所で、その美しさを発揮することに重点を置いている。龍は、装飾的なアニメーションで人気があり、密度の高いテーマである。彫刻の各作品では、それが「チャンノイ（chamnoi)」または「チャンロン（chamlong)」または「チャンボンケン（chambongkenh)」、「ボンヒン（bonghinh)」のいずれであっても、中央には常に下から上まで滑る短い、頭を上げ、顔を外に向ける太った体を持つ大きな龍（母龍）である。

龍は大きな頭、突き出た額、大きく開いた口、獅子鼻を持ち、髪はランス状の火刃が集まって後ろに飛び、静的な空間の中に躍動感を演出している。龍の体は丸く、蛇の鱗が浮いているような層で覆われており、脚には闘鶏の拍車のような鋭い爪が 4 本ある。母竜の周りには、髭をなでたり、水遊びをしているのか、たくさんの子竜が 5 匹、7 匹、9 匹、11 匹、13 匹の奇数で並んでいる。龍の周りには、鳳凰や一角獣など四魂の動物が一緒にいる。鳳凰はしばしば、優雅で上品な踊りの動きを持つ「家宝」芸を披露する姿勢で描かれている。龍は仲間や四霊と一緒に描かれるだけでなく、屋根や板の外側にセットでは「霊」ではない他の動物とも調和している。それらは、豚、犬、山羊、鹿、猫、魚...といった村やベトナム人に馴染みの深い動物たちですが、やはり一番多いのは豚である。豚はドンホ画のようにがっしりした体つきをしているが、イノシシのようにやんちゃである。豚は背中に座って龍の髭を持ち、龍の髪を持ち、龍の尾を噛む度胸まである。このほかにも、豚が葉っぱを食べていたり、猫が昼間寝ていたり、人が象に乗っていたり、

象を抱いていたり、象と戦っていたりと、平和な村の様子を表す小さなシーンが亭には描かれている。

3.1.3.崇拝の儀式

亭は古代の美しさだけでなく、毎年旧暦によって、多くの大きな祭りが行われる場所としても知られている。行事の日、村民は村の祭りに参加し、歌祭り、料理祭り、民俗ゲームなど、人々を結合し、精神生活を向上させ、ベトナム文化の独自性を維持するために、共同体に行きる。休日やテトになると、人々は亭に礼拝に来る。

亭の祭りの儀式は地方によって異なるが、大部分は秋の終わり、または、春の始まりに執り行われるようである。

ベトナムの沿海地帯の各村では鯨や海の神様を祀る神社がたくさん見られる。漁民は漁に出る前に、参拝に行き、幸運を祈る。また、本土で夫や子供を待つ妻や母親はそこに行って、沖合いで漁をしている夫や子供の無事を祈る。

城隍信仰に崇拝される神様の中には多数民族であるキン族だけでなく、ムオン族、ヌン族、ザオ族などの各少数民族もいる。これはベトナムにある各少数民族の文化交流と緊密な関係を示していると言える。

熱帯モンスーン気候の土地に住んでいるベトナムの人々は、昔から農業で生計を立ててきた。自然と共に生活を送っているで、土の神、水の神、稲の神をあがめてきた。そして、ベトナム人は、これらの神様を母親として考え、古代ベトナム人は、大自然を自分の母として奉っていた。

毎年タインホアン（城隍）の祭りは村や街の最も盛大な祭日である。この日はご馳走を作る以外にも、タインホアン（城

隍）の故事にちなんだ劇を上演したり、御輿を担いだり、各種の遊び、たとえば武闘会、闘鶏、舟漕ぎ、シーソー、人間将棋、綱引き、歌劇、水上人形劇などを楽しんだりする。その盛大な雰囲気は昼夜を分かたず、数日にも及んだりすることもある。そしてこの日は、老若男女を問わず一様に楽しみにしているのが、特に年頃の男女は知り合う好機であるから、最も待ち望んだ。

タインホアン（城隍）の祭りには、人々は人民国家の為に犠牲になった英雄烈士も同時に偲ぶ。

彼らは民衆の尊敬を集め、その名を記念碑に永遠に刻まれるのである。

3.2. 日本の神道・神社とベトナムの城隍神信仰・亭の建築の対照

3.2.1. 共通点

+由来：どちらも自然現象の崇拝と自然の力の崇拝に由来する。神々のリストにある自然の神々のほとんどは、太陽の神、木の神、川の神、山の神、雷雨の神など、両国に存在する。自然への依存は、創造の共通の基盤である。

+発展の道：自然の神秘的な力を崇拝することの基盤から、稲作社会が生まれたとき、どちらも農業信仰に関連する神々を崇拝し、祈り、祈り、神々が彼らに無病息災、商売繁盛をもたらすことを重視する傾向があった。豊作、恵まれた雨と風、平和な家族、教育を受けて従順な子供たち、そしてより豊かな生活。そして、社会の階級格差が出現すると、戦争や部族間の争い、侵略戦争が続発し、新たな神のシステム、人神が誕生した。

彼らは王であり、将軍であり、社会の支配階級であり、戦いの英雄であり、発見の英雄であり、村とコミュニティの平和な生活の構築に貢献してきた。それが、両宗教.信仰の共通の発展の道である。

+多神教:どちらの宗教も、悪神か善神かに関係なく、すべての神々に敬意を表している。悪霊は、人々が無礼を示すと、災害をもたらし、人々に苦しみと不幸をもたらす力である。しかし、悪霊にも二面性があり、破壊的で破壊的な性質を示すこともあるが、人々に良いことをもたらすこともある。

+祭りについて:この 2 つの宗教の祭りのシナリオは、細部は異なるが、基本的には同じである。かつては、農暦に合わせて春（種まき）、秋（収穫）の２つの季節を中心に、神々への加護と加護の祈願、天候や季節の豊作などを祈願して祀った。祭りの内容は２つの部分に分かれている。セレモニーは少数の代表者がいる家で行われる。行列は、太陽の女神を表す鏡のシンボルと村の守護者を表す文字「神」を持つ神のシンボルの行列である。セレモニーであるお祭りの次には、コミュニティの全員が参加する最も重要な部分である。両面のホイ文字には、華麗に描かれた駕籠に乗った神々の行列が描かれている。駕篭を担ぐ少年たちは皆、純粋な資質を持ったコミュニティから選ばれている。行列の意味は概念も道筋も違うかもしれないが、どちらも一年中密かに神秘の世界から神様をお迎えし、この世に戻ってこられるようにするという目的は同じである。彼らに敬意を表する。さらに、祭りは資源に基づく活動と見なされ、村や集落の人々と出会う時間であり、村のコミュニティの連帯

の強さを示す場所であり、地域コミュニティの創造に貢献する。持続可能な住居である。

ベトナムのすべての村に城隍を祀る神社があるように、日本のすべての村には神社がある。ここは、礼拝の場であり、村の祭りを開催する場所でもあり、コミュニティが楽しく娯楽のために集まる場所でもある。

そして次の類似点は、「純和風」の神社建築とベトナム北部の村の亭の類似点である。

最初の類似点は建築計画である。前述のように、ベトナムで最も古い神社と現存する最も古い村の亭は、最も長方形の平面(-)を持っている。両方の他のテクスチャ

どちらのアーキテクチャも後に生まれた。神道の本殿と村の亭の建築レイアウトでは、儀式と集会のための部分と神々の住居に捧げられた部分の 2 つの異なる部分に分けられる。両脇の神々を祀る部分は閉鎖空間となっており、祭日以外は立ち入ることはできない。この空間の中には、他の宗教や信念のような偶像はない。

私たちが簡単に見ることができる 2 番目の特徴は、それらがすべて原則に基づいていることである。家のすべての建築コンポーネントの構造は一緒にリンクされて、完全なフレーム、建物の重量を作成する。柱が荷重を支えるため、家の壁は、雨と太陽を覆う効果しかない。

技術的な構造に関しては、「純和風」の神道建築は通常 2 番目のタイプである。これは、切妻に 3 つの柱があるためである。真ん中の柱が軸受けの主役で、柱の上部には屋根の梁があ

り、柱の足元は地面まで伸びている。2 つのポーチ柱がその役割を果たし、リンクして屋根の重量を支える。クロスバーは 3 つの柱すべてを接続して 1 つのフォークを形成する。これは、ベトナムのアーキテクチャではかなり一般的な仕様でもある。また、追加するために、このタイプの構造にはベッドとマッチも完全にない。一方、ベトナムの家のフレームの基本原則は、ベッド、オーバーラップ、およびドッキングのシステムが屋根を支える上で重要な役割を果たすということである。

これらの 2 つのアーキテクチャの類似点の最後の特徴は、両側のほとんどすべての建築要素が塗装されておらず、森の木々の素朴な外観を保持していることである。

以下は日本の神道とベトナムの城隍神信仰との類似点の比較表である。

神道と城隍神信仰の対照

対照の標示	類似点
1. 由来	農業の民衆の生活に関する。
2. 崇拝の対照	自然の神、先祖、英雄を崇拝する。
3. 崇拝の建築	木の原料は主にして、立派で、豪華な建築である。
4. 行事	建築における崇拝する対象に関する行事がある。
5. 役割	それぞれの国の国民に対して、重要な役割である。

3. 2. 2. 相違点

上記の類似点に加えて、神道の信仰間の城隍神信仰にも違いがある。

まず、第一に精神的に、ベトナムでは領主の子孫は両親を尊敬して村の皇帝になることはできない。ベトナムと日本の君主制はこれら二つの信念に非常に関心を持っているが、ベトナムでは天皇の信念は宮廷の権力と同一視されていない。シタデルは国家によって精神的に管理されている:履歴書を授与され、叙階された。しかし、依然として村の神である。ベトナム君主制の宮廷では、多くの王が村の守護者にされたが、王室の城隍のシステムはなかった。その発展の歴史の中で、神道が仏教や他の宗教と密接な関係を持っていた場合、ベトナムの守護信仰は、少数を除いて他の宗教との関係を確立していない。皇帝は孔子です、老ダム。

ベトナムの村々は幾分孤立した性質を持っており、宮廷の利害はそれほど密接ではないため、シタデルは統一された組織を確立できなかった。日本。今でも、タンホアンは村の神である。

神輿について：神道の信者は、神を訪れる前に禊の儀式を行い、その後、葬儀の箱にお金を入れて祈る必要がない。タンホアン神を訪ねている間は、これらの儀式を行う必要はない。

機能面では、コミューンは純粋に宗教的な意味を持っていない。-対照的に、村の亭はより大きな役割を担っている。それは、宗教（信仰）および文化の中心地としての役割を果たすだけでなく、村の政治的および社会的中心としての役割も果たしている。

神社の管理は、専門の事務組織によって行われる。村の村の亭は、村人によって選ばれた人が管理し、香炉の世話をしている。彼はまだ村の自宅に滞在することができる。村の亭には、村の誰の住居もない。

建築に関しては、村の亭は１つまたは複数の神々を崇拝している。禁裏御所（神社の本殿）も一つしかなく、神社によっては春日大社など多くの御殿を建てることができるが、その代表例が大社である。神社の建築様式は中国の建築様式に影響を与え、次のように提示された村の亭の建築とは完全に異なる：ドゥーコンの存在、支持構造の変化-トラスからベッドに変更され、建築要素村の亭の建築は外国建築の影響が少ない。しかし、神道の建築は労働者の生活シーンをテーマにした装飾的な彫刻を使用しないのに対し、ベトナムの村の亭の建築はそれを彼の最も誇りに思っている特徴の１つとして取り入れているという重要な違いがあることを強調する必要がある。

以下は日本の神道とベトナムの城隍神信仰との相違点の比較表である。

神道と城隍神信仰の対照

相違点	日本の神道	ベトナムの城隍神信仰
1. 由来	仏教の精神と結合する	母神信仰、先祖信仰と結合する
2. 崇拝の対照	神の数特に多い。様々な様子と形式	ほとんどは村の保護神である。福伸と悪心もいる
3. 崇拝の建築	神社は数が多くて、規模も大きい	昔からの亭は少なくて、小・中の規模である
4. 行事・儀礼	神社の祭り以外、日常生活に関する礼儀も行う。	城隍神に関する祭りしかない。
5. 役割	宗教の役割が大きい、天皇体制にも保護する。	現代の生活に役割は減少し、村の人だけと大切。

3.3. ベトナムでの城隍神信仰と日本での神道 - 両方の役割についての評価

神道の役割:神道は愛国心と天皇への忠誠を、神々を代表する最高の存在として強調する。天皇は神道信仰の守護者と見なされてきた。神道は愛国心を強め、共同体に連帯の精神を形成する。

遠い祖先の時代から受け継がれて来た日本の伝統的な信仰である神道が求めるものは、自然とともに生き、祖先の心を己の心とし、人と平和に暮らすことである。自然と調和して生きることによって安心を見いだし、祖先の時代から受け継がれて来た伝統を尊重することによって精神的な支えを得て、人と人とをつなぐ絆を大切にして、より良い生き方を見いだすことができるのだと、日本人は昔から信じて来た。

本来、日本人の自然観は、畏敬の念をもって神々の世界としての山や森、川や海に接することでありました。こうした態度はおそらく日本の土地が青々としていて海に囲まれ、比較的温和な気候とはっきりした四季に恵まれているせいでもあるでしょうが、ともかく日本人は自然を征服すべき敵としてではなく、慎みをもって接すべき神々の恵みあふれる聖なる空間として見たのである。

人間を自然の一部として扱い、自然は人間の仲間であり、血肉を分けた兄弟姉妹であると考える。これは、まさに、東アジアの仙や道につながる思想や哲学にほかならない。つまり土着の民俗宗教（信仰）の考え方である。

神道は日本人の精神生活において大きな役割を果たしており、日本人の生活の大小を問わずすべての儀式や行為に大きな影響を与えている。日本は自然からのわずかな恩恵に大きく依存している。アニミズム的な物事観を持つ古代の日本人は、現象の中に存在する神が彼らの生活に影響を与える可能性があるとすぐに信じした。そのため、彼らは自然の神々である親善神として崇拝し、崇め、日常生活の平和と幸福を祈る仕事としてこれらの神々に信仰を置いている。

近代における科学の進歩の結果、世界は大きく発展を遂げ、その進展は世界中で止まることなく続いている。しかしこの発展は同時に地球の自然環境の破壊を意味し、その危機はますます深まりつつあるのである。この地球的危機に急いで対処しなければならないのですが、まず自然と人間との関係を見直し、昔から積み上げて来た人類の知恵を活用して破滅への行進をどのようにして止めるかを考えなくてはならない。

現在、科学と技術が急速に発展する時代において、人々は意識のギャップ、社会的不正、不確実性、人生の運と不幸を説明することができたが、皇帝の玉座には依然として次のような否定できない役割がある。

城隍神信仰はコミュニティリンクの役割がある。城隍の信仰は、限られた農地共同体の中で人間の共同体をつなぐ役割を果たし、住民の精神的な集いの場となっている。

城隍は村人の生活を目の当たりにし、忠実で優しい人に祝福と祝福を与え、残酷で不道徳な人を罰した。災害が発生する

と、人々はしばしば礼拝に訪れ、保護を求める。不正があった場合、人々はしばしば礼拝し、証人の神に良い変化を保ち、その人を免罪するように頼む。神がコミュニティの各メンバーの活動を常に監督していることを常に心に留めているため、コミュニティの誰もが常に法律と倫理に従う。神はまた、外国の侵略者との戦いで人々を支援し、陰の道によって自然災害や伝染病を鎮圧する力でもある。神は毎年村人によって犠牲にされ、島のために祈るたびに、より美しい文字で封建裁判所によって叙階された。

伝統的な文化的価値の維持と保存：村の城隍は、ベトナムの農民が何世代にもわたって作り上げてきた文化的要素の 1 つである。シタデルに付随するのは、村の祭りである。これは、各地域のアイデンティティが染み込んだ伝統的な文化活動である。

堅実な精神的サポートとして：城隍は精神的なシンボルとなり、人々の確固たる精神的支えとなっている。彼らにとって、神だけが好天と豊作をもたらすのを助けることができるからである。彼らの生活がますます安定し、繁栄するのを助けるため、城隍のいない村は安全ではない。

結論

日本の神道は多神教であり、日本人は、山、川、海、太陽、雨、雷雨、国民的英雄、家族の先祖など、自然や社会において超自然的な力を持つと考えられる物や現象を崇拝する。現在の生活での保護と保護を祈る。

神々や村の領主を崇拝するベトナム人の信仰は、実際には神々を崇拝するものであり、愛国心、人間性、方向性を教育するために、村のコミュニティを結び、全国に拡大する役割を果たしているものである。それらは、今日私たちが継承し、促進する必要がある国の非常に貴重な文化的およびコミュニケーション的である。

村民の信仰および日常生活のうちにも，村落の共同体的性格と集団主義への志向が看取される。信仰面では，村の守護神（城隍神）祭祀の慣行が村民を結ぶ精神的な紐帯となった。また公田（村落共有地）の所有と割換耕作，〈民公〉（労働交換）と共同労働，〈甲〉（合力・扶助組織）など，さまざまの労働慣習に裏打ちされた村落の集団主義は，村民相互間の連帯と共属意識を生むもとになっている。

日本人にとって、神道信仰は日本の歴史であり、伝統であり、生活でもある。神道の目的と意味は、古代日本の歴史の独立性と、その子や孫の起源を確認することである。以上で考察した日本人の思想は、日本人の思想や文化を考察する過程において非常に重要な位置を占めていると言える。日本独特のニュアンスのあるアイデアである。神道の思想は、日本の思想や文化を調べ、日本の思想や文化と他の国の思想や文化との相違点や類似点を見つけるための基礎を築くのに役立つ。地域、

特に日本の思想、文化とベトナムの文化の間の違いや類似点を見つけるのに役立つ。両国の人々が理解し、近づき、未来への道でますます効果的に協力するのを助ける。

参考資料

１． https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A5%9E%E9%81%93

2. https://www.jinjahoncho.or.jp/shinto/shinto_izanai

3. https://www.jinjahoncho.or.jp/shinto/shinto_izanai

4. http://www.shinto.org/wordjp/?page_id=2

5. https://www.famille-kazokusou.com/magazine/manner/155

6. https://en-park.net/words/7880

7. https://www.jinjahoncho.or.jp/shinto/ise

8. https://kotobank.jp/word/%E5%9F%8E%E9%9A%8D%E7%A5%9E-79183

9.http://www.interfaith-center,org/index.html.

10.http://www.japansociety,org/index.html.

11.http://www.jinjahoncho.or.jp/iroha/jinja/index6.html

12.http://www.jinjahoncho.or.jp/iroha/matsuri/index.html

13.http://www.amazon.co.jp/Yume-No-Hon-BookDreams/dp/0809510871

14.http://www.shinto.org/

15.http://www.isejingu.or.jp/

16.http://www.japantoday.com

17.http://www.japan-guide.com

18.http://suhoctre.hisforum.net/t2601-topic

付録

十渡 鳥居

少年少女まつり

巫女

初宮詣

伏見 稲荷 参道

古代時期

手水舎

神社で結婚式の服装

狛犬　　広島県廿日市市にある 海に浮かぶ鳥居

Long Xuyen の My Phuoc 共同住宅にある Thanh Hoang (Nguyen Huu Canh)神の祭壇。

カオ ラオ ハ共同住宅、ハ チャック コミューン、ボー チャック地区のタイン ホアン村を礼拝する場所

厳島神社

ドンキー共同住宅でのお祭り